

令和3年(ヨ)第449号 老朽美浜3号機運転禁止仮処分申立事件

債権者 石地優ほか8名

債務者 関西電力株式会社

準備書面(6)

(福島第一原発事故の被害はいまも続く)

2022年 月 日

大阪地方裁判所 第1民事部 御中

債権者ら代理人 弁護士 井戸謙一
ほか

福島第一原発事故は、ある日突然、人々に無用な被ばくをさせ、人々の生活を奪い、住み慣れた土地から人々を追い出し、村や町全体をまるごと奪い、いまだに奪われた人々の生活、住み慣れた土地、村や町は元通りに戻っていない。

原発は、以下で述べるとおり、事故を起こした場合に、広範囲に甚大で永続的で不可逆な被害をもたらす性質を有する施設である。他方、原発の稼働により発出されるエネルギーは膨大で、しかも直ちに停止することができないために事故発生時の安全確保が困難である。安全確保対策の要である「止める」「冷やす」「閉じ込める」装置は、原子力事業者の想定を超える自然現象に対しては極めて脆弱である。原子力事業者の想定を超える自然現象が原発を襲った場合には、福島第一原発事故のように、複数あるいは全ての装置が同時に損傷し、大量の放射性物質が原発の外部に大量に放出される危険がある。

このような深刻な危険が現実化しないために、原発は第1層から第5層（避難計

画)までの複数の防護階層で何重にも防護しなければ安全(人々を無用に被ばくさせない)を確保できないのである。

以下では、被害を受けた多くの人々・地域のうちごく僅かであるが、双葉町、大熊町、浪江町、飯館村の人々の被害状況を紹介する。

目次

第1 福島県概要	6
1 福島県全体地図	6
2 避難指示区域の変遷	7
(1) 2011年(平成23年)4月22日時点	7
(2) 2020年(令和2年)3月10日時点	8
第2 双葉町(ふたばまち)(福島第一原発が立地)	10
1 双葉町の概要	10
2 原発事故前の町の概要	10
3 原発事故直後の避難	14
4 避難指示によって住民が追い出された町の様子	18
(1) 原発PR看板「原子力明るい未来のエネルギー」	18
(2) 草に覆われたガソリンスタンド	21
(3) 双葉町消防団第二分団	22
(4) 双葉駅の近辺	23
(5) ブロック塀が壊れたままの建物	24
(6) 屋根瓦が剥がれたままの家屋	25
(7) マリーンハウスふたば	25
(8) JR常磐線双葉駅	27
(9) 汚染土を入れたフレコンバック	29

(10)	中間貯蔵施設	29
5	現在も大半の住民が避難を続けている	31
第3	大熊町（おおくままち）（福島第一原発が立地）	33
1	大熊町の概要	33
2	原発事故前の町の概要	33
3	原発事故直後の避難	38
4	双葉病院の避難	45
(1)	第1陣避難	45
(2)	第2陣避難（約10時間，原発の爆発，多数の死者）	46
(3)	第3陣避難（自衛隊撤退，「もう限界だ」）	49
(4)	第4陣避難（救出漏れ）	50
(5)	第5陣避難	50
(6)	遺族の意見陳述	50
5	避難指示によって住民が追い出された町の様子	52
(1)	放射線量を示す旗	52
(2)	町内を自由に活動する動物	53
(3)	大野駅前	53
(4)	住宅出入口前にバリケードが設置されている	55
6	現在も大半の住民が避難を続けている	55
第4	浪江町（なみえまち）	57
1	浪江町の概要	57
2	原発事故前の町の概要	57
3	原発事故による被害状況，避難，役場の移転等	61
(1)	被害概要	61
(2)	地震による被害	61
(3)	津波による被害	62

(4)	原発事故の長期避難に伴う住宅損壊被害	63
(5)	原発事故による屋内退避, 避難	64
(6)	高線量の地域と知らずに町内の津島地区へ避難	64
(7)	白い防護服の男たち	65
(8)	津島地区の汚染	65
(9)	町外脱出, 町長の涙	66
4	請戸の浜 (うけどのはま)	68
(1)	請戸の浜の悲劇	68
(2)	馬場町長の後悔	69
(3)	清水社長 (当時) への訴え	71
(4)	卒塔婆	72
(5)	がれきの山	73
(6)	海岸もがれきがそのまま	74
(7)	道路脇にも砂やがれき	74
5	避難指示によって住民が追い出された町の様子	75
(1)	請戸小学校	75
(2)	マリンパークなみえ	75
(3)	配達されなかった新聞	77
(4)	震災当日に終日運転を見合わせる掲示	78
(5)	浪江駅前の青果店	79
(6)	津島地区の紅葉, 高線量	79
(7)	草に覆われた J R 常磐線	80
6	現在も避難が続いている	82
第5	飯舘村 (いいたてむら)	84
1	飯舘村の概要	84
2	原発事故前の村の概要	87

3	原発事故による被害状況，避難，役場の移転等	92
	(1) 地震による被害	92
	(2) 沿岸部からの避難者の受け入れ	93
	(3) 村に現れた白い服の男	94
	(4) 放射性物質を乗せて降る雪	94
	(5) 水道水の摂取制限	94
	(6) 「専門家」の講演を聞いて飯舘村に留まったものがあること	95
	(7) 全村避難	96
	(6) 原発事故が奪った農業者の誇り	98
4	いいたて全村見守り隊	99
5	仮設住宅での生活	100
6	除染が豊かな土地を奪った	101
	(1) 除染方法	101
	(2) 除染前の風景	102
	(3) 除染の様子	105
	(4) 除染後も高濃度の放射性物質が検出される	105
	(5) 長年大切に育んできた豊かな土を奪われた悲しみ	107
7	避難指示解除後も戻る人は少ない	108
第6	まとめ	109

第1 福島県概要

1 福島県全体地図

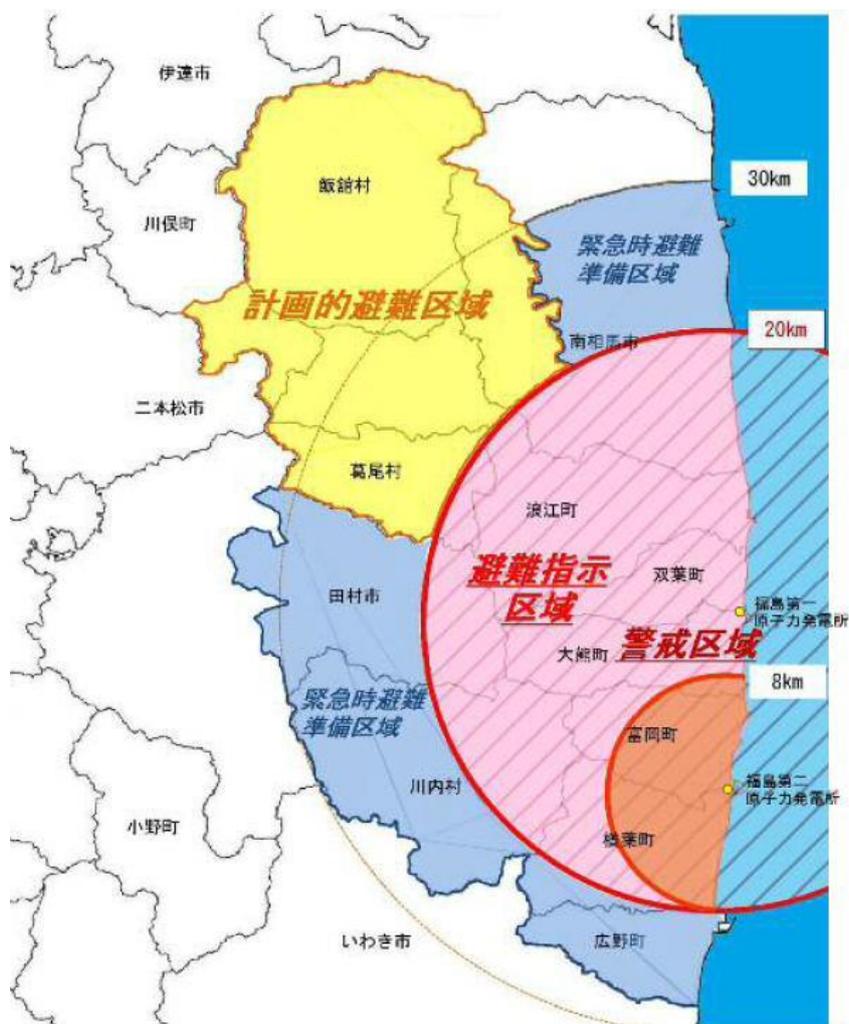


(福島県ホームページ掲載の地図に、福島第一原発の位置を赤色丸印で加筆)

¹ <https://www.pref.fukushima.lg.jp/site/iju-tokyo/city-town-vill.html#iwaki>

2 避難指示区域の変遷

(1) 2011年(平成23年)4月22日時点



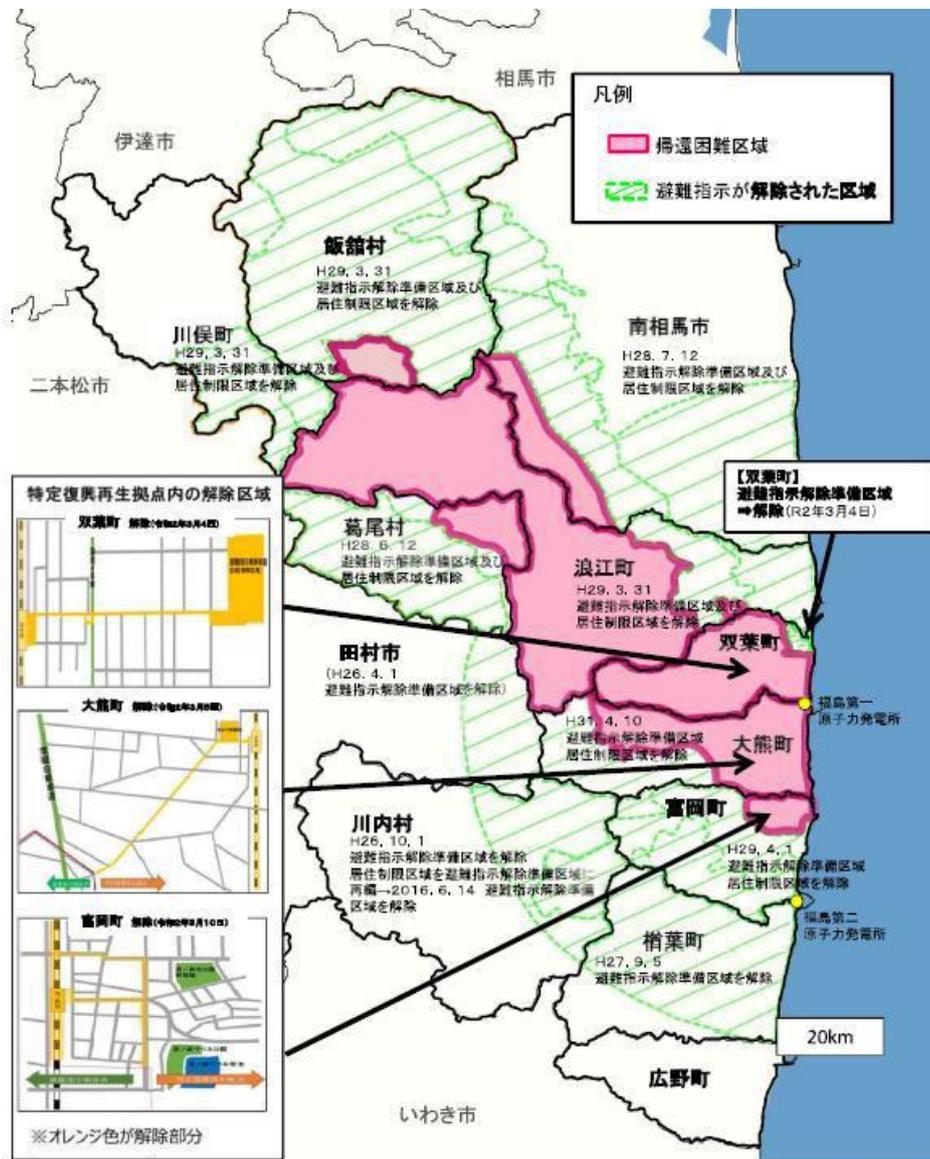
(甲117の1から抜粋)

福島第一原発事故による避難区域指定は、福島県内の12市町村に及んだ。

避難した人数は、2011年(平成23年)8月29日時点で、把握されているだけでも、警戒区域(福島第一原発から半径20km圏)で約7万8000人、計画的避難区域(20km以遠で年間積算線量が20mSvに達するおそれがある地域)で約1万10人、緊急時避難準備区域(半径20~30km圏で計画的避難区域及び屋内避難指示が解除された地域を

除く地域) で約5万8510人, 合計では約14万6520人に達した
(甲3・351頁)。

(2) 2020年(令和2年)3月10日時点



(甲117の2から抜粋)

原発事故から11年経過した現在においても, 上図のとおり, 7市町村が帰還困難区域²とされ, 避難指示が継続されている。

² 帰還困難区域とは, 年間積算線量50mSv超(事故後6年を経過してもなお, 年間20mSv

避難者数は、復興庁が把握しているだけでも³、2022年（令和4年）2月8日時点で3万8139人にのぼる（甲118）。

を下回らないおそれのある区域）をいう。

³ 避難指示区域外からの避難者（区域外避難者、自主避難者と呼称される。）は、避難先住宅の無償提供が2017年（平成29年）3月末で打ち切られ、各市町村が区域外避難者の多くを「避難者」に計上しなくなったために復興庁の把握する避難者数から漏れている。

第2 双葉町（ふたばまち）（福島第一原発が立地）

1 双葉町の概要

双葉町は東に太平洋，西に阿武隈山系をのぞむ，海と山にいだかれた豊かな自然を誇る町である。福島県浜通り地方のほぼ中央にあたり，双葉郡の北東部に位置している。

J R常磐線と国道6号が平行しながら町の中心部を南北に縦断している。比較的温暖な気候が特徴で，東北地方にありながら冬は積雪が少なく，とても住みやすい自然環境に恵まれている。



(双葉町全体 Google map)

2 原発事故前の町の概要

双葉町は，冬の日照時間が長く，花卉（かき）栽培が盛んに行われた。特に，スイートピー栽培の期間は長く，8月末ごろからハウス内に直接種をまいて，11月末から翌年5月初めまで花が次々と咲く。



(スイートピーの出荷作業 甲108・12頁)

浜通り特有の季節風「やませ」の影響により、夏が涼しい気候となっている。元気に育つ、ハウレンソウの有機栽培が盛んだった。ハウレンソウは15度から20度ほどの気温が生育に適しており、夏場の海からの涼しい風が、おいしいハウレンソウを育ててくれた。年に6回、収穫する周年栽培が行われていた。



(斎藤さんのハウレンソウ畑 甲108・12頁)

双葉町のダルマは、当時のJAふたば女性部双葉支部ダルマ部会の会員がデザインを考え、30年ほど前から作り始めた。ダルマには町章をモチーフとした金色の縁取りと太平洋をあらわす青い縁取りに町の花さくら、町の鳥きじの羽をモチーフにしたものの2種類がある。双葉ダルマは、完成すると大安の日

に初発（しょはつ）神社で開運の祈禱をしてから販売されていた。（甲 1 0 8 ・ 2 0 頁）



（双葉町ダルマ市露店（2011年1月）⁴）

標葉（しねは）せんだん太鼓保存会は、双葉町内の同好の士が集まり、1992年（平成4年）8月19日に結成された。「初心を忘れず、和太鼓をこよなく愛し、独自の創造力で活動する集団」を合言葉に、結成依頼、週2回の練習を欠かさず、太鼓を打ってきた。

県内はもちろん、全国各地のイベントなどで演奏してきた。（甲 1 0 8 ・ 2 0 頁）



（甲 1 0 8 ・ 2 0 頁）

⁴ 甲 1 0 8 ・ 2 0 頁

歴地と伝統を誇る「相馬野馬追」標葉郷（そうまのまおい しねはごう）は、浪江・双葉・大熊の3町で構成され、妙見小高（みょうけんおだか）神社に供奉（ぐぶ）している。各町でミニ野馬追神旗争奪戦が毎年7月下旬に行われる。期間中はまるで戦国時代に紛れ込んだかのようなようである。



（ミニ野馬追神旗争奪戦⁵）

当地方は、江戸時代中期の享保年間から、相馬公の許可を得て酒造りを行なってきた、当地方で最も歴史のある蔵元である冨沢酒造店では、地元双葉町で栽培された良質米を原料に阿武隈山系からの伏流水を仕込み水とし、地元の酒造工と共に、心を込めて、造ってきた。小さい蔵元だが、米作りから消費まで全て見守ることができ、地酒「白富士」として愛されてきた。

⁵ 甲108・21頁



(富沢酒造店 甲108・13頁)

3 原発事故直後の避難

2011年(平成23年)3月11日、東北地方太平洋沖地震津波が発生し、双葉町の震度は6強であった。建物は全壊103棟、半壊14棟、一部破損1棟(避難指示区域設定の影響で詳細調査不能。(平成30年3月末現在))、大津波によって約3km²(町全域の約5.8%)が浸水し、津波による死者は20名にのぼった(2018年(平成30年)3月末現在)。



(甲108・26頁, 27頁)



(甲108・27頁 大地震により損壊した双葉町両竹の県道)

翌3月12日5時44分、菅首相が福島第一原発から半径10km圏内の住民に避難を指示したことを受けて、町は7時30分に全町避難等を決定、8時00分には約2,200人の町民が川俣町へ避難を開始し、14時00分頃には双葉町役場を閉鎖した。その後、川俣町合宿所に災害対策本部を設置した。



(甲108・70頁, 71頁)

3月12日15時36分

1号機の原子炉建屋が爆発。

同日 18時25分

原発から半径20km圏内の住民に避難指示。

3月14日11時01分

3号機の原子炉建屋が爆発。

3月15日6時14分頃

4号機の原子炉建屋が爆発。

同じ頃

2号機から大量の放射性物質放出。

3月19日に、約1200人の町民が川俣町から「さいたまスーパーアリーナ」へ避難した。同施設内に「埼玉出張所」が設置された（甲108・126頁，127頁）。



（埼玉県スーパーアリーナへ避難した住民たち⁶⁾）

⁶⁾ 甲108・106頁，107頁

3月28日に「さいたまスーパーアリーナ」で、震災後初の臨時議会を開催した。

3月30日～31日、約1,200人の町民が埼玉県加須市・旧騎西高校に避難した（甲108・126頁，127頁）。

4月1日に、埼玉県加須市・旧騎西高校内に「双葉町埼玉支所」を開設。ホテルリステル猪苗代内に「双葉町猪苗代出張所」を開設した。



(双葉町→川俣町→さいたまスーパーアリーナ→埼玉県加須市 Google map)

4月21日、福島第一原発から半径20km圏内の警戒区域設定が決まる(2日に区域設定)(以上、双葉町ホームページ⁷参照)

4月21日に警戒区域の設定が決まり、一時帰宅の条件が明らかになった。一時帰宅の条件は、2時間以内で一世帯一人など極端な制限が課せられた。

「バス移動ではわずかな荷物しか持てない。」との町民の声もあった。震災翌

⁷ <https://www.town.fukushima-futaba.lg.jp/9550.htm>

日に着の身着のまま避難し、一度も自宅に戻っていない。「パソコンや写真、会社の書類、春夏用の服も持ってきたい。自家用車での一時的帰宅を認めるべきだ」との意見もあった。(以上、甲108・127頁)

4月22日に町全域が警戒区域になり、2013年(平成25年)5月にはごく一部の地域が避難指示解除準備区域になった。

4 避難指示によって住民が追い出された町の様子

(1) 原発PR看板「原子力明るい未来のエネルギー」



(2011年4月14日撮影，双葉町中心部⁸)

「原子力明るい未来のエネルギー」の標語を作成した大沼さんは、現在(引用者注：2016年(平成28年)当時)40歳である。生まれた時から町に原発があった世代である。

大沼さんは、当該標語を作成し表彰を受けたことについて、「小学六年生のときに7，8号機を増設することが決まり、原発を推進する標語を考えてくるようにと宿題が出されました。自分の考えた標語が選ばれ、表彰された

⁸ 甲108・126頁，127頁

ときのうれしさは忘れられません」と語る。商店街の入口に掲げられた看板をみるたび誇らしかった。

自ら書いた標語どおり，東電と原子力は明るい未来をもたらしてくれる。そう思っていた数年後に事故が起きた。

避難先で双葉町が報道されるたびに，あの看板が映し出される。

「本来，撤去してほしいのはボクの方だった。でもそこから逃れてはいけない」。

事故から一年後，赤ん坊と妻をつれて，はじめて「脱原発」を訴えた。そして「自分で考えた標語は自分にしか直せない」と一時帰宅のたびに看板を訂正した。



「原発でいい思いしてきたんだろ」「被害者面するな」と言われることもある。確かにそうかもしれない。でも，原発を信じていた自分が180度考えを変えざるをえなくなった。そのことを伝えたい。中間処理施設という名の最終処分場が作られようとしている双葉町には，もう住めないだろう。だしたら子どもたちに残せるものは，愚かさもひっくるめた町の歴史と自分の人生だ。そして「こっちのほうが明るい未来のエネルギーでしょう」と，太

陽光パネルの事業を始めた。



(栃木県につくったパネルを息子と掃除する)

そんな活動をしていた大沼さんの耳に、昨年（引用者注：2015年（平成27年））3月、双葉町が看板を撤去するらしいという情報が飛び込んできた。「老朽化して危険だから」と言うが、納得できない。

「町の中には今にも崩れそうな橋げたや家屋、倒れた自販機がそのままになっているのに。看板ひとつ撤去するヒマがあったら、仮設住宅を見回るほうが大事なんじゃないですか」。

案の定この頃、仮設住宅でお年寄りが自殺していた。原発とともに歩んだ双葉町。それを象徴する看板は邪魔なのか。過去をなかつたものにしていいのか。たった一人で署名への協力を呼び掛けた。菅直人氏や元福島県知事の佐藤栄作久氏を含め、多くの人たちが賛同してくれた。双葉町民からは「原発を肯定するような看板は外したほうがいいよ」という意見もあったが、自分の気持ちを丁寧に説明し、6500人分の署名を集めた。（以上、「標語「原子力明るい未来のエネルギー」をつくった男～大沼勇治さんのたたかい」から抜粋⁹⁾

⁹⁾ <http://www.labornetjp.org/news/2016/0612horikiri>

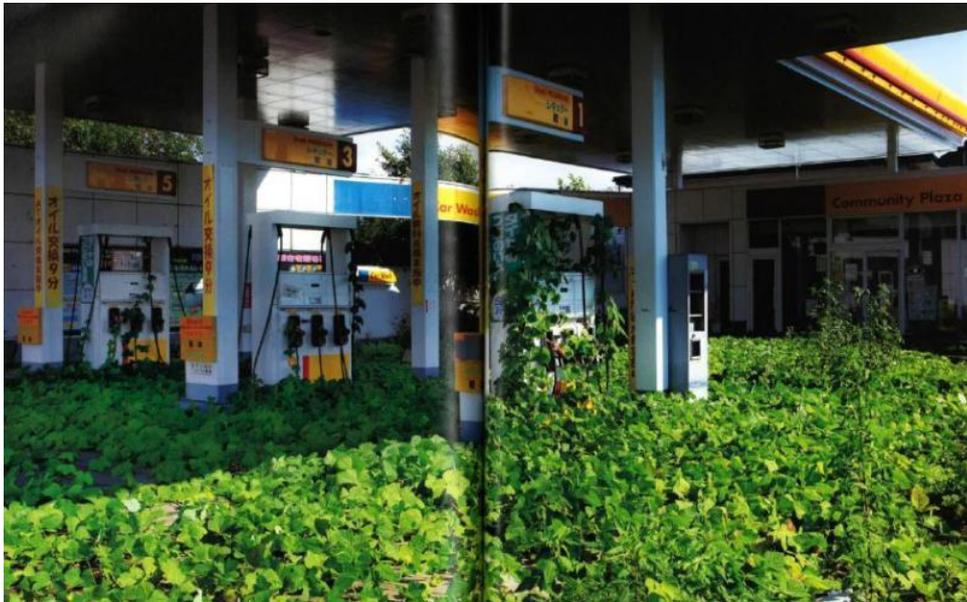


(2016年3月5日撮影, 双葉町中心部¹⁰⁾)

老朽化が進んだ広報看板は撤去され、現在、双葉町にある伝承館で展示されている。

(2) 草に覆われたガソリンスタンド

双葉町の国道6号線沿いのガソリンスタンドは、一面、草に覆われている。



(2015年(平成27年)9月撮影 双葉町の国道6号線沿いのガソリンスタンド¹¹⁾)

¹⁰ 甲108・126頁, 127頁

¹¹ 中筋純『かさぶた 福島The Silent Views』64頁, 65頁

(3) 双葉町消防団第二分団

双葉駅の近くに位置する双葉町消防第二分団の建物に設置されている時計は、東北地方太平洋沖地震発生（14時46分）を受けて、止まったままである。消防車が出入りするシャッターは壊れたままである。



(撮影日：2021年5月23日，撮影場所：双葉町，撮影者：佐藤真弥)

(4) 双葉駅の近辺



(撮影日：2021年5月23日，撮影場所：双葉町，撮影者：佐藤真弥)



(撮影日：2021年5月23日，撮影場所：双葉町，撮影者：佐藤真弥)



(撮影日：2021年5月23日，撮影場所：双葉町，撮影者：佐藤真弥)

(5) ブロック塀が壊れたままの建物



(撮影日：2020年12月23日，撮影場所：双葉町，撮影者：海渡雄一)

(6) 屋根瓦が剥がれたままの家屋

家屋は、屋根瓦が剥がれたまま放置されている。



(撮影日：2020年12月23日，撮影場所：双葉町，撮影者：海渡雄一)

(7) マリーンハウスふたば

双葉海水浴場は、平成10、13年に環境省が認定する「日本の水浴場55選、88選」に、2006年（平成18年）には同省認定の「快水浴場百選」に選ばれている。

マリーンハウスふたば（白色の三角形の建物）は、海浜公園に設けられていた町営の海の家であり、誰でも気軽に利用できた。



(甲108・9頁)

しかし、原発事故によって帰還困難区域となり、2015年（平成27年）12月にはマリンハウスふたば（下の写真の三角形の建物）の周辺は放射性廃棄物の仮置き場となっていた（下の写真）。



(2015年12月撮影 マリンハウスふたば，放射性廃棄物)¹²

¹² 広河隆一『写真記録 チェルノブイリと福島 人々に何が起きたか』261頁

2021年（令和3年）5月，マリーナハウスふたばは，利用者もおらず，朽ちている（下の写真）。



（撮影日：2021年5月23日，撮影場所：マリーナハウスふたば，撮影者：佐藤真弥）

（8） JR常磐線双葉駅

2015年（平成27年）12月に撮影されたJR常磐線双葉駅は，雑草で埋め尽くされていた（下の写真）。



(2015年12月撮影 JR常磐線双葉駅¹³⁾)

¹³ 広河隆一『写真記録 チェルノブイリと福島 人々に何が起きたか』272頁, 273頁

(9) 汚染土を入れたフレコンバック

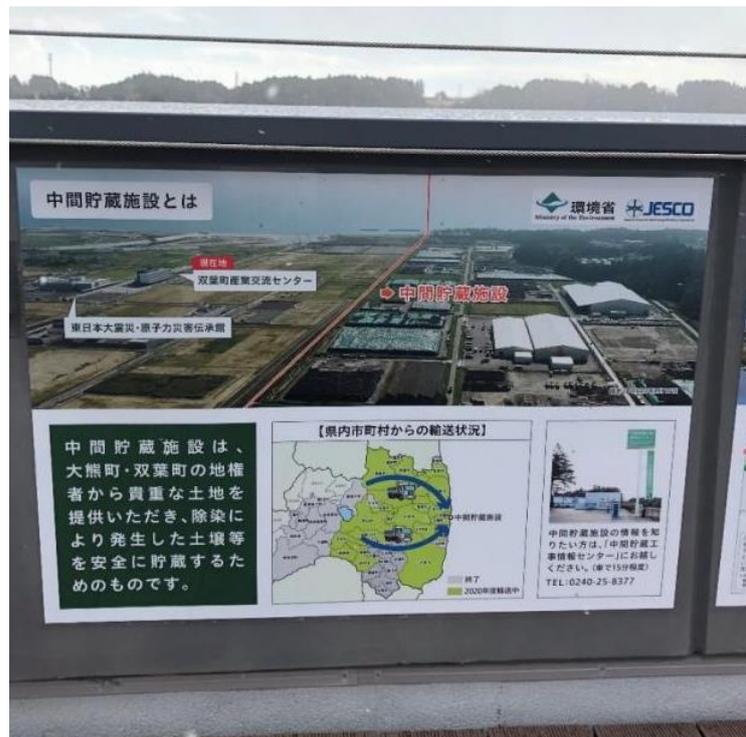


(撮影日：2020年12月23日，撮影場所：双葉町，撮影者：海渡雄一)

放射性物質で汚染された土を入れたフレコンバックが積み重ねられている。山の向こうに見える煙突は，福島第一原発である。

(10) 中間貯蔵施設

下の写真は，中間貯蔵施設のすぐ傍に双葉町交流センターに設置してある，中間貯蔵施設を説明する掲示板を撮影したものである。



(撮影日：2020年12月23日，撮影場所：双葉町産業交流センター，撮影者：海渡雄一)

中間貯蔵施設は、福島第1原発を取り囲む約1600ヘクタールの敷地に整備中である。東京ドーム11個分に及ぶ約1400万 m^3 の廃棄物を運び込むため、1日当たり延べ約2400台の大型トラックが仮置き場との間を行き交う。これまでに（引用者注：2021年（令和3年）3月）総量の約75%に当たる1048万 m^3 を搬入した¹⁴。

¹⁴ 時事通信2021年（令和3年）3月9日「除染土，見通せない最終処分 中間貯蔵施設へ搬入大詰め―福島・東日本大震災10年」



(環境省「中間貯蔵施設の配置図」)

中間貯蔵施設は、放射性物質によって汚染された土を剥ぎ取り（除染）、剥ぎ取った土を保管する施設とされているものの、最終処分場の土地確保の目途は立っておらず、中間貯蔵施設が最終処分場になるのではないかと懸念されている。

大熊町の住民は「県外の人からすれば、なぜ福島を除染土を引き受けなければならぬのかと感ずるだろう」と述べる¹⁵。

福島県の内堀雅雄知事は2021年（令和3年）2月中旬、小泉進次郎環境相とのオンライン会談で、中間貯蔵施設について「国からの要請を受け、大熊町と双葉町が苦渋の決断で受け入れた」と過去の経緯を強調し、「国の責務として、県外最終処分を約束通り実施してほしい」とくぎを刺した¹⁶。

5 現在も大半の住民が避難を続けている

2020年（令和2年）3月になって当該避難指示解除準備区域と双葉駅周辺等のみについて避難指示が解除された（下図の水色部分）。

しかし、双葉町の住民の大半（下図の水色部分以外）は、2022年現在も

¹⁵ 同時事通信

¹⁶ 同時事通信

帰還困難区域である。原発事故時の人口は7100人であったのに対して（甲119）、2022年（令和4年）2月28日時点でも6699人が避難している（甲120）。



（双葉町 「避難指示区域の概念図」 から抜粋）¹⁷



（甲117の2 2020年（令和2年）3月10日時点 避難指示区域の変遷¹⁸）

¹⁷ <https://www.town.fukushima-futaba.lg.jp/secure/11055/01.pdf>

¹⁸ <https://www.pref.fukushima.lg.jp/img/portal/template02/hinansjijihensen20200310.pdf>

第3 大熊町（おおくままち）（福島第一原発が立地）

1 大熊町の概要

大熊町は、2011年（平成23年）3月11日時点の住民基本台帳上の人口は1万1505人、4235世帯であった。

1年を通して比較的温暖な気候で積雪はほとんどない。浜通り地方は日照時間も長く、その気候と水はけのよい土壌を活かして栽培する梨やキウイが特産品だった。初夏に咲く白い梨の花は町の花でもある。

約5kmにわたる海岸線は断崖が多く、漁港に適さない。そのため、町は平成7年に養殖場を設置し、ヒラメやカレイなどの養殖漁業を推進した。秋には清流・熊川を遡上するサケも有名だった。（以上、甲109・46頁）



（大熊町全体 Google map）

2 原発事故前の町の概要

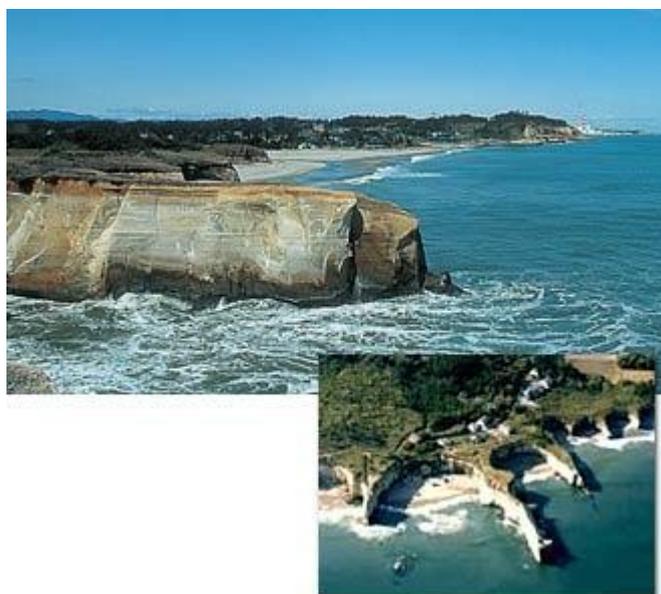
うつくしま百名山にも選ばれた日隠山（ひがくれやま）は、大熊町の西南部にあり標高601.5m（一等三角点有り）で坂下ダムから登山道が整備され、大自然と野鳥のさえざりに包まれた片道約2時間の気軽な登山が楽しめた。登

山道の途中には、参詣清水があり、登山者の喉を潤してくれた。



(日隠山 (閉鎖中))

双葉地方の海岸線は、断崖が続く海食海岸が特徴である。海に突き出した岬は、雄大な海の景色を見せてくれる。



(馬の背岬 (閉鎖中))

毎年桜の咲く4月中旬に、聖徳太子祭りが催され、駅前商店街を威勢のいい子どもみこしが練り歩き、町内への春の到来を喜んでいた。



(聖徳太子祭りの様子)

毎年、昭和の日に山開きが行われ、家族連れやグループ約700人が登山する。豚汁のサービスやお楽しみ抽選会も行われていた。



(日隠山山開き)

熊川海水浴場海開きは、毎年、海の前日の日曜日に行われ、地引網、記念品の配布、豚汁のサービス、各種イベントが盛りだくさんで、家族連れやカップルで賑っていた。



(熊川海水浴場海開き)

相馬野馬追には毎年参加し、役場前の公園で神旗争奪戦を行い勇壮な戦国絵巻を見ることができていた。



(ミニ野馬追祭り)

熊川を遡上する鮭を捕獲する、豪快な地引網を見学できた。その他、鮭汁の無料試食、カラオケ大会、つかみ取り等が行われていた。



(熊川鮭まつり)

自然の香りと甘さがいっぱいの大熊の梨「幸水」・「豊水」。有機質の肥料で栽培し、肉質・糖度にすぐれていた。



(梨)

洋梨，キウイフルーツも特産品であった。エメラルド・グリーンの水々しさと，そよ風のような爽やかな香りと素晴らしい味わいの大熊キウイを，美の象徴「ビーナス」と名づけていた。

ヒラメやマツカワガレイ，ホシガレイといった高級魚も特産品であった。マツカワガレイは，近年天然物の年間漁獲量は数十キロの希少魚種で，いまや「幻の鰈」となった高級ガレイである。ホシガレイも，天然物の年間漁獲量は数トンで，市場でも滅多に見かけないため「幻の鰈」になりつつあるホシガレイ，市場価格はヒラメを上回る。



(ヒラメ， マツカワ， ホシガレイ)

(以上， 大熊町ホームページ¹⁹より抜粋)

3 原発事故直後の避難

2011年（平成23年）3月12日午前6時前，大熊町役場2階総務課の電話が鳴った。町長宛ての電話の相手は，内閣総理大臣補佐官であった。東京電力福島第一原子力発電所の半径10km圏内避難指示の連絡だった。その電話と並行し，大熊町の災害対策本部には「警察官が町外へ避難誘導している」という目撃情報が寄せられた。役場にいた警察官も福島県警本部とやりとりし，避難指示が出ていると報告した。本来，避難指示は警察から知らされるものではない。職員は福島県庁に電話をかけ，県の担当者にも確認をとった。

10km圏内は大熊町居住地のほぼ全域にあたり，この指示は「全町避難」を意味するに等しい。大熊町は消防団などに招集をかけ，地震からの復旧・救助活動に着手しようというところだった。県への電話を手に職員は思わず「町を捨てて逃げろってことか！」と声を荒げた。電話の相手は何も言わなかつ

¹⁹ <https://www.town.okuma.fukushima.jp/soshiki/somu/1602.html>

た。(甲109・19頁)

県は避難先として田村市を指定した。12日午前6時9分、町は防災無線で全町民に対し、避難のため最寄りの集会所に集まるよう指示した。国から派遣されていたバス約50台を主な移動手段とし、スポーツセンターを皮切りに福島第一原発に近いところから移送を始めた。防災訓練でも想定されていない町外へ全町民が避難するという事態に現場は混乱した。



(原発10km圏内の避難指示で大熊中からバスに乗り込む町民²⁰)

²⁰ 甲109・14頁, 15頁



(避難のため町役場に集合した人たち²¹)

「国道288号を西へ」というほか、職員も具体的な行先を知らないままバスに乗った。想定された田村市の避難所は町に近い方から満杯になり、遠藤に立つ田村市の消防団員たちがさらに西へとバスを誘導した。「どこまで行くんだろう・・・」。町民は13日未明までかけて、田村市、三春町、小野町、郡山市に分散することになった。(甲109・19頁)

²¹ 甲109・16頁



(大熊町から田村市，三春町，小野町，郡山市へ Google map)

12日午後2時ごろには、町内にひと気はなくなった。避難しそびれた町民がいることを想定し、町幹部数人と消防団員ら計10人ほどが役場に残ったが、本部にいた東京電力社員が避難を促した。午後3時36分、福島第一原発から約4.7km離れた役場に「ドーン」という大きな音が響いた。1号機が水素爆発した。瞬時に事態を察知した幹部たちも急いで町を後にした。(甲109・19頁)

大熊を離れた町の災害対策本部は、田村市総合体育館に再設置された。田村市長にあいさつするため先に町を出ていた町長と幹部たちが体育館で合流したとき、どこに町民がいるのか分からない状態だった。



(避難所の住民を対象に行われたスクリーニング)

3月12日早朝の避難指示で大熊町を離れたとき、職員も含め町民の多くは福島第一原発の状況も分からず、「ほんの2、3日のつもり」で着の身着のままバスに乗り込んだ。避難先にあったテレビで初めて、12日の1号機水素爆発を知ったという人も多かった。福島第一原発の状況は、14日午前11時1分の3号機水素爆発、15日午前6時14分ごろの4号機水素爆発と悪化の一途をたどる。「ああ・・・」。職員は避難所でテレビにくぎ付けになっていた町民の口から、言葉にならない思いがこぼれるのを聞いた。(甲109・25頁)

町民の避難先は町が把握するだけでも田村市、三春町、小野町、郡山市の避難所二十数か所に及んでいた。町は田村市総合体育館に災害対策本部を置いて田村市と連携するとともに、三春町、小野町、郡山市の動きに対応する連絡員を設置。しかし、4市町に主な避難先が分散し、公用車、ガソリン不足が続く状況で、町災対本部と各避難所の迅速な情報共有は難しかった。(甲109・25頁)

町を出たとき、またすぐに会えると思っていた人たちは生きているのか、ど

ここに避難しているのか。さらに、いつまで自分たちは避難所にいられるのか、町はこれからどうなるのか。それぞれに避難生活を送りながら、町民の不安や混乱は大きかった。しかしその時点では、職員にも、東京電力や国の情報に接する災害対策本部にも先は見通せなかった。町民の一人が綴った当時の日記には、親戚や知人の安否を気遣う言葉が並ぶ。そして無事が判明すれば、願った。

「また、会えますように。」



全町避難から約2週間後の3月25日、大熊町は会津若松市に拠点を移すことを発表した。避難所からの移動日は4月3、4日であった。役場機能のほか町立の幼稚園、小・中学校も同市で再開、希望する町民は応急仮設住宅ができるまで同市や周辺の旅館やホテルなどに入居するという、中長期的な避難を視野にいれた対応だった。

「なぜ会津なのか」。各避難先で職員の説明や報道を通じ、会津への移転を知

った町民から声が上がった。

全町避難後、数日のうちに福島第一原発では水素爆発が相次ぎ、早期帰還の期待はしぼんだ。一方で、着の身着のままの避難を強いられた町民の心身の健康状態の悪化が目立ってきていた。町災害対策本部を置いた田村市自体が一部に避難指示が出た区域を抱える避難自治対で、受け入れ側の負担も懸念された。さらに新年度を間近に控え、子どもの学校を心配する町民の声も強かった。「どこか落ち着いた環境で、町も町民も一緒にこれからについて考える拠点が必要だ」。そう考えていた町長は3月17日夜、学校について相談してきた教育長に対し、4月からの学校再開とその場所の選定を指示した。(甲109・31頁)

選定にあたっては、学校として使える廃校に加え、希望するすべての町民を受け入れられる自治体の規模、医療機関の充実、福島第一原発からの距離などを考慮した。浮上したのが会津若松市であった。打診すると、会津若松市は学校として使える廃校に加え、幼稚園のために閉演した保育所、役場の拠点になる施設も提示してくれた。会津若松市長と町長の会談を経て、3月25日の発表に至った。(甲109・31頁)



(大熊町から会津若松市へ Google map)

会津若松市は大熊町から西へ約100kmに位置する。

冬も比較的温暖な浜通り地方に位置していた大熊町と、豪雪地帯に区分される会津若松市では気候や文化の違いが大きく、町民にとって必ずしもなじみのある地域ではなかった。それでも移動希望者は町の予想を超え、4月3、4日には2100人あまりの町民が避難所から会津に移った。

その後も移動者は増え、9月30日時点で会津若松市では3723人、会津地方全体では4175人が避難生活を送ることになる。会津若松市の人たちは折に触れ、戊辰戦争での受難を引き合いに「自分たちが大熊町民を受け入れないでどうする」とふるさとを追われる立場に理解を示してくれた。(甲109・31頁)



(以上, 甲109)

4 双葉病院の避難

(1) 第1陣避難

3月12日早朝5時44分に、福島第一原発の半径10km圏内の住民に避難指示が出された。双葉病院は、福島第一原発から約4.5kmの場所に位置しているため、この避難指示の対象だった。

避難指示を受けて、12日14時頃に、双葉病院と隣接するドーヴィル双葉では、第1陣避難がなされた。バス5台で双葉病院の入院患者209人が避難を開始した。

(2) 第2陣避難（約10時間、原発の爆発、多数の死者）

取り残された患者や入所者は、双葉病院では129人、ドーヴィル双葉では98人だった。

12日15時頃、自衛隊は、双葉病院に取り残されている患者らを救出するために、原発の西方約60kmに位置する郡山駐屯地を出発した。自衛隊が救出へ向かっていたところ、1号機が水素爆発した。自衛隊は、放射線防護の装備を備えていなかったため、やむなく郡山駐屯地に引き返すことになった。

引き返してから、放射線防護の装備がなかなか整わず、救出へ向けた出発がおよそ丸一日以上延びた。自衛隊は、ようやく届いたタイベックスーツを着用し、当初の予定から丸一日以上遅れた14日午前0時頃、双葉病院へと再出発した。

14日午前4時頃、自衛隊は、双葉病院に到着した。

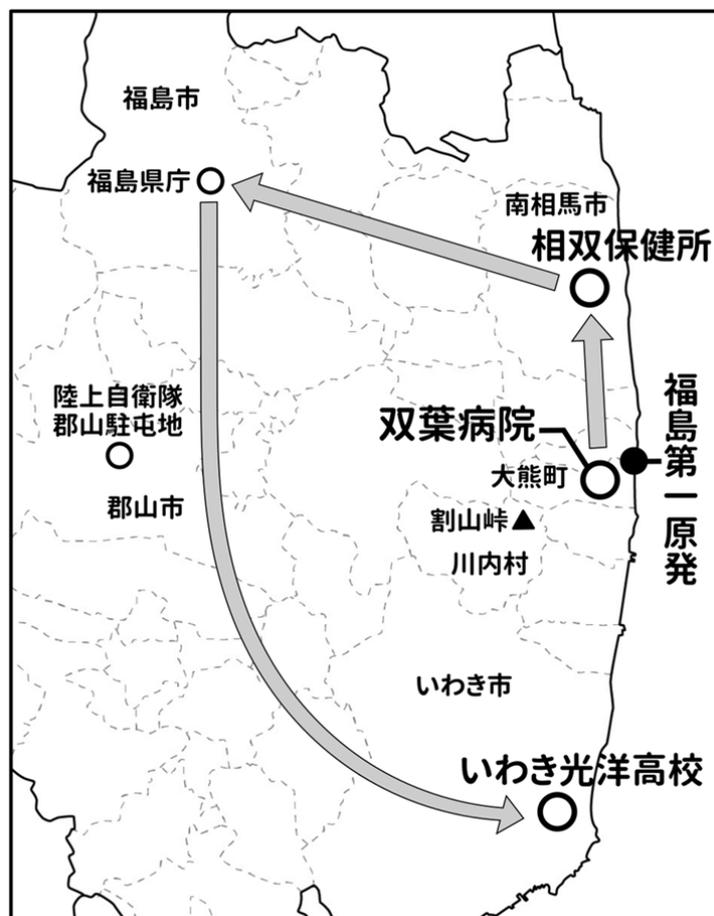
双葉病院には、寝たきりなどの重症患者ばかりで、末期がんの患者もいた。事前の情報では、患者数は少なく、軽症の患者たちだとのことだったので、自衛隊は、通常のバス数台しか用意しておらず、重症の入院患者らを搬送するためのストレッチャーや医療設備のある車両の用意はしていなかった。

双葉病院などのスタッフは、院長を含め6人のみだった。スタッフらは、ほとんど食事を摂っておらず、備蓄してあった水やジュースなどを飲んでいるだけという過酷な状態だった。

点滴をしている重症の患者であっても、相双保健所までの30分程度の短時間の搬送であれば大丈夫ということで、点滴を外して搬送することになった。点滴を外されたことで、この時点で、患者らは、水分、栄養分を摂取できなくなった。

寝かせた状態で乗せるので、搬送できる人数は極めて限られた。

14日午前10時30分頃に、第2陣避難の車両が、双葉病院から相双保健所に向けて出発した。



出発時には、第2陣の避難者の受け入れ先病院は、決まっていなかった。どの病院からも、医師が足りていない、患者を受け入れる余裕がないと受け入れを断られていた。病院スタッフは、患者を乗せた車両に付き添えなかった。数少ない病院スタッフは、病院に取り残された患者さんをケアするために、自らの危険を顧みず、そばで原発が何度も爆発する病院に残った。

第2陣避難の最中の14日午前11時01分に、3号機が水素爆発を起こした。「ドンというような、突き上げるような爆発音」が聞こえてきて白煙が上がっていた。

第2陣バスは、その日の正午頃に、スクリーニング場所である南相馬市の相双保健所に到着した。双葉病院から相双保健所までは、海岸沿いの道路を使えば30分くらいで着くが、原発周辺を避けてう回路を通らざるを得なかったもので、通常の3倍の1時間30分ほどの時間を要した。

相双保健所に到着した患者らは、バスの中でスクリーニングを受けた後、バスに乗ったまま待機し続けた。



(原子力安全委員会原子力施設等防災専門部会被ばく医療分科会第30回会合資料²²⁾)

14日午後3時頃、患者らの乗ったバスは出発した。この日の夕方ころ、オフサイトセンターの屋外で700 $\mu\text{Sv}/\text{h}$ 、屋内でも10 $\mu\text{Sv}/\text{h}$ もの極めて高い濃度の線量を観測していた。

14日の夜8時頃に、患者らの乗ったバスは、いわき光洋高校体育館に到着した。出発から約10時間も経過していた。

双葉病院の看護副部長の証言によると、「バスの車内は、排せつ物による異

²²「東京電力福島第一原子力発電所事故対応におけるDMATの活動」 国立病院機構災害医療センター近藤久禎

<https://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/3383394/www.nsc.go.jp/senmon/shidai/hibakubun/hibakubun030/siryo2-1.pdf>

臭が漂い、バスの座席にきちんと座っている患者はほとんどおらず、防護服を着せられた患者は手足のきかない状態、悪く言ったら糞虫が包まれているような手足がきかない状態でそこに座らされている状態で、また、シートの足下で亡くなっている患者もいる」など壮絶な状況だったことが明らかになった。

患者らは、寒い体育館の床の上に直接敷かれた毛布の上に寝かされました。体育館の奥には、パーテーションで仕切られた箇所があり、搬送中のバスの中で亡くなった患者さんはそこに安置されていた。



(原子力安全委員会原子力施設等防災専門部会被ばく医療分科会第30回会合資料²³)

(3) 第3陣避難（自衛隊撤退、「もう限界だ」）

第二陣がいわき光洋高校に到着した14日の夜以降も、自衛隊は残された患者たちの救出活動を続けていた。

ところが、14日の深夜には自衛隊は撤退した。その場にいた警察は、自衛

²³「東京電力福島第一原子力発電所事故対応におけるDMATの活動」 国立病院機構災害医療センター近藤久禎

<https://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/3383394/www.nsc.go.jp/senmon/shidai/hibakubun/hibakubun030/siryo2-1.pdf>

隊の撤退を見て、ただならぬ状態であると判断し、当該病院スタッフを警察の車両で強制避難させ、割山(わりやま)峠付近まで退避させた。これ以降は、双葉病院には医療スタッフはいない状態となってしまった。

3月15日の午前1時半ころに自衛隊は、再び、双葉病院に向かい、午前9時頃には避難作業を開始した。第3陣避難である。

この避難活動にあたった自衛官の供述調書によると、救助作業中に線量計の音が鳴る間隔がどんどん短くなり、放射線の塊が近づいてくるような感覚だった旨、医師免許を持った自衛官が、『もう限界だ』と叫び、すぐに病院を出発するように指示をした旨が述べられている。線量があまりにも高くなったため、救助作業が途中で打ち切れ、42人の患者が取り残されたことが明らかになっている。

(4) 第4陣避難（救出漏れ）

15日の11時半に7人を救出した。作業にあたった自衛官の調書によれば、部下に指示して病院内を確認したところ、ほかに患者がいらないとの報告だったので、7名の救助で終わった。

(5) 第5陣避難

しかし、その後別棟に35人の患者が残されているのを知って再び病院に戻り、15日の深夜までかかって残りの35人の救助を行った（第5陣）と供述している。

全員救出までに、3月11日から実に4日間もかかった。放射線が救出活動を阻んだ結果である。患者さんたちは、体力を奪われ、医療ケアを受けられず、44人もの命が奪われてしまった。

(6) 遺族の意見陳述

双葉病院からの避難で亡くなった被害者の遺族らは、東元経営陣（勝俣被告人、武藤被告人、武黒被告人）に対する業務上過失致死傷罪を問う刑事事件の法廷で、意見陳述をした。

介護老人保健施設「ドーヴィル双葉」に入所していた両親を亡くした女性は、「想定外で片付けられると悔しくてなりません。太平洋岸には他にも原発があるのに、なぜ福島第一原発だけが爆発したのか。何かしらの対策を取っていれば、女川や東海第二のように事故は防げたのではないかと思うと許せません。わかっている対策をせず、みすみす爆発させたのなら未必の故意ではないのか。誰一人責任者が責任を取っていないのは悔しい」などと述べた。

ドーヴィル双葉に入所していた祖父母を亡くした男性は、「(2002年(平成14年)の)東電のトラブル隠しのあとに起きているのがとても残念です。高度な注意義務を負う経営者に、刑事責任をとってもらわないと今後の教訓にならない。もう二度と同じ思いをする人が出ないように」などと述べた。

双葉病院に入院していた父(97歳)を亡くした女性(代理人が代読)は、「父は寝たきりで2時間ごとの体位交換が必要でした。経口摂取も困難で中心静脈カテーテルで栄養や薬剤の投与を受けていましたが、避難の際に抜かれ、水分や栄養分を摂取できなくなりました。このような酷い状況に10時間近くも置かれ、父は亡くなったそうです。父は寒がりでしたし、水分や栄養を摂取できず、身動きもできない状況で、どれほど辛く、苦しかったことでしょう。私が結婚するにあたって、夫が実家に挨拶に訪れた際に、父は「ここは原発があるからな」と不安を口にしました。原発のことを不安に思っていた父が、原発事故で亡くなるとは全く想像もしていませんでした」などと述べた。

双葉病院に入院していた兄を亡くした人(代理人が代読)は、「(事故の)直前の数年間、大きな災害が続いた。国会でも原発の津波対策について質疑があった。東電の経営者は、あくまで他人事のように見ていたのではないか。もし切迫した緊張感を持って経営していれば事故は避けられただろう。東電は自らが安全神話にとりつかれ、慢心があったとしかいいようがありません」などと述べた。

双葉病院に入院していた母を亡くした女性は、「遺体を確認したとき、骨と

皮のミイラのような感じだった。被告人の方、この時の気持ちが分かりますか。この裁判であなた方は「部下にまかせていた。私の知り得ることではない」と言い続けている。経営破たんした別の会社の社長は「すべて私の責任。社員を責めないで」と言っていた。あなた方もトップの責任として、なぜこのくらいのことを言えないのですか。母の死因は急性心不全だが、東電に殺されたと思っている」などと述べた。(以上、福島原発刑事訴訟支援団「母は東電に殺された」被害者遺族の陳述」刑事裁判傍聴記：第34回公判（添田孝史）」²⁴)

5 避難指示によって住民が追い出された町の様子

(1) 放射線量を示す旗

原発敷地に沿って、空間の放射線量のレベルが旗の色であらわされていた。大熊町は高線量を示す赤い印になっていた。



(大熊町 2015年12月²⁵)

²⁴ <https://shien-dan.org/soeda-20181114/>

²⁵ 広河隆一『写真記録 チェルノブイリと福島 人々に何が起きたか』251頁

(2) 町内を自由に活動する動物

大熊町内を歩くダチョウ。ダチョウ園から逃げ出した。自動車も建物も朽ち果てている。



(大熊町 2011年10月²⁶)

(3) 大野駅前

大野駅を出てすぐの左手にある住宅は、屋根瓦が剥がれ、窓は開いたままの状態朽ちている。

なお、東京電力株主代表訴訟（東電の株主らが福島第一原発事故を起こした責任を追及している訴訟（2022年（令和4年）3月時点で東京地裁係属中））では、裁判官らが、大野駅からバスに乗って、福島第一原発へ向かい、原発敷地内を視察する現地進行協議を行った。

²⁶ 広河隆一『写真記録 チェルノブイリと福島 人々に何が起きたか』276頁



(ANN ニュース 2021年3月11日²⁷⁾)

大野駅を出てすぐの右手にある道路は、いままバリケードでふさがれている。



(ANN ニュース 2021年3月11日²⁸⁾)

²⁷ANN ニュースチャンネル 2021年(令和3年)3月11日「“10年前のまま”福島・大熊町 帰還困難区域多く・・・(2021年3月11日)」

(<https://www.youtube.com/watch?v=tElH9IGSWK0>) 53秒時点の映像をスクリーンショットしたもの。

²⁸ 同上の動画における1分19秒時点の映像をスクリーンショットしたもの。

(4) 住宅出入口前にバリケードが設置されている



(撮影日：2020年12月19日，撮影場所：大熊町，撮影者：佐藤真弥)

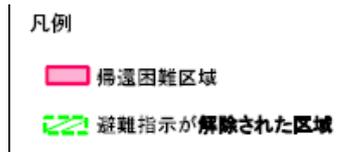
6 現在も大半の住民が避難を続けている

福島第一原発事故により，発電所の半径20km圏内に「警戒区域」が設定されたため，町全域が避難対象区域となった。町役場の主要機能は約100km西に位置する会津若松市に移転を余儀なくされ，町民約11000人も，会津若松市やいわき市をはじめ，全国各地に避難をした。

2019年（平成31年）4月10日，大川原地区（居住制限区域）と中屋敷地区（避難指示解除準備区域）の避難指示が解除され，震災と原発事故から8年余りの時間を経て，ようやくふるさとの一部を取り戻した。

2020年（令和2年）3月5日，JR大野駅周辺と県立大野病院敷地などの避難指示が解除された。町内の帰還困難区域で避難指示が解除されたのは初めてのことである。JR常磐線が3月14日に全線再開し，大野駅も同日，利用再開された。

しかし，大熊町の大部分が帰還困難区域のままである。



(甲117の2)

原発事故時の人口は11505人であったところ、2022年（令和4年）2月1日時点で、主な避難先に避難した人数だけでも8861人にのぼる。具体的には、福島県内では浜通り地方に5,453人（いわき市4541人，南相馬市273人），中通り地方1714人（郡山市1023人，福島市202人），会津地方641人（会津若松市552人），福島県外では主に茨城県462人，埼玉県347人，東京都244人である（甲110）。

第4 浪江町（なみえまち）

1 浪江町の概要

福島県浪江町は、福島県浜通り（沿岸部）の北部に位置し、双葉郡に属する。東は太平洋に面し、西は阿武隈山系に囲まれ、山も、川も、海もある自然豊かなまちである。東北地方といっても冬はほとんど積雪がなく、夏は涼しく過ごしやすい。

浪江町役場から福島第一原発までは、約8 kmである。



(浪江町役場，浪江駅，請戸小学校，請戸の浜，福島第一原発 Google map)

2 原発事故前の町の概要

請戸川リバーライン桜祭りは、請戸川沿い約1.5 kmにわたり、およそ120本のソメイヨシノが咲き誇るさまは、まるで桜のトンネルをくぐるような

感覚。「ふくしま遊歩道50選」にも選定された圧巻の春風景であった。



標葉（しねは）郷相馬野馬追（のまおい）祭は、国の重要無形民俗文化財に指定された、一千有余年の昔から続く伝統祭礼である。まさに戦国絵巻そのままを再現した姿で町内を凱進行列し、中央公園にて標葉郷神旗争奪戦を行う。



十日市祭は、その年の豊作を祝い、冬を越すための生活用品を備えるための市場として始まった。一部地域の避難指示解除によって、2017年（平成29年）より町内開催が実現し、かつての賑わいが復活しつつある。



津島地区は、紅葉が見事であるが、いままも帰還困難区域である。



請戸漁港出初式は、晴れやかな新年の空の下、極彩色の大漁旗をいくつもたなびかせた漁船が、次々と沖合に向かって出港する。海上では、海の安全と豊漁を祈願して御神酒を捧げる。(開催日は1月2日)



大堀相馬焼は、300年以上の歴史を持つ、国指定の伝統的工芸品である。「青ひび」「走り駒」、また熱いものを入れても熱くならず持つことができる「二重焼」は、他に類を見ない特別な技法によるものである。



なみえ焼そばは、極太の中華麺に具はもやしと豚肉のみ。ラードで炒めて、パンチの効いた特製ソースが決め手の焼そばである。ニンニク一味をたっぷりかける。



(以上、浪江町ホームページより²⁹⁾)

3 原発事故による被害状況，避難，役場の移転等

(1) 被害概要

浪江町では，地震による家屋等の倒壊による被害と津波の襲来により，大きな被害を受けた。この災害による浪江町の死者数は182人であり，このうち津波による溺死が150人，行方不明であるものの死亡届が出された方が31名，圧迫死が1名となっている。また，震災による関連死は92名であった。2016年（平成28年）3月までに383人となっている。

このほか家畜やペットなど，飼育されていた動物たちが放置されるなど，地域によって状況は異なるが，町全体に大きな被害が発生した。

(2) 地震による被害

浪江町では，震度6強を記録した本震及びその後の余震によって家屋の倒壊・損壊等の被害が発生した。

²⁹ <https://www.town.namie.fukushima.jp/site/ijyuteijyu/25228.html>
<https://www.town.namie.fukushima.jp/site/ijyuteijyu/25226.html>



(左の写真：【権現堂地区】(平成23年3月12日撮影) 2階屋根が崩れ落ち、道路を覆っている。

(右の写真：【権現堂地区】(平成23年3月12日撮影) 家屋の倒壊により街灯の傾き、道路へ屋根の崩れが生じている。)

(3) 津波による被害

浪江町においては、請戸地区、中浜地区、両竹地区、棚塩地区が津波の襲来を受け、多くの町民の命を失うとともに、家屋流出等の被害を受けた。津波による浪江町の浸水面積は約6 km³ (町面積の3%) である。住居など約600棟が流失し、推定28.9万tもの災害廃棄物が残された。



(いずれも請戸地内 (浪江町震災記録誌より) ³⁰⁾

(4) 原発事故の長期避難に伴う住宅損壊被害

原発事故による全町避難となり、震災発生後、地震による全壊等の大きな被害は免れたものの一部損壊した住家は、長期にわたり町内への立入が制限されたため、動物の侵入に見舞われ多くの住宅等が損傷した。このため、多くの住民が住宅を解体抹消することとなった。

2016年(平成28年)3月末までの住宅等の解体件数は195件(環境省による家屋解体)。(浪江町「浪江町の被害・被災状況マップ」³¹⁾

³⁰ <https://www.town.namie.fukushima.jp/uploaded/attachment/8401.pdf>

³¹ <https://www.town.namie.fukushima.jp/uploaded/attachment/8401.pdf>

(5) 原発事故による屋内退避，避難

3月11日に発生した地震の影響でライフラインやインフラなどに甚大な被害が発生した。

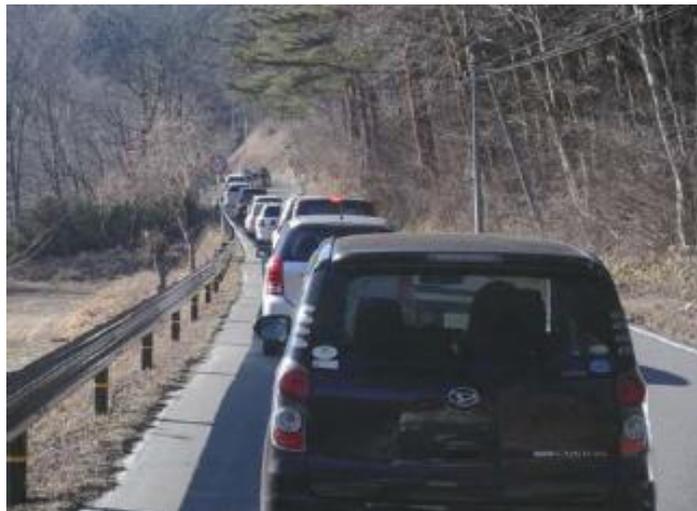
国や県，通報連絡協定を結んでいた東京電力からは一切，連絡及び通報がない中で，テレビの報道のみを頼りに屋内退避や避難の対応に当たった。

(甲111の2・60頁)

(6) 高線量の地域と知らずに町内の津島地区へ避難

3月12日には福島第一原子力発電所の10km圏外へ避難することが決定され，災害対策本部を津島支所に移転するとともに，10km圏内の避難所から避難者の移送を行った。こうして開設された津島地区の避難所は18か所に及んだ。(甲111の2・63頁)

馬場町長が津島地区の避難所に到着したのは午後6時過ぎだった。通常であれば，浪江町の中心市街地から30分前後で来られる距離だったが，国道114号線が避難の車で大渋滞を起こしており，到着するまでに3時間以上もかかった。(三浦英之『白い土地 ルポ 福島 「帰還困難区域」とその周辺』117頁)



(津島地区へ避難する車列 (2011年3月12日撮影³²)

³² 浪江町震災記録誌「避難の経緯・避難所」 URLは同上

(7) 白い防護服の男たち

3月12日、海沿いの地域から、約1万人もの人々が津島地区に避難した。小中学校や公民館、寺だけでは足りず、避難した人々は民家にも泊めてもらった。菅野みずえさんの家にも朝から次々と人がやってきて、夜には25人になった。多くが親戚や知人だったが、見知らぬ人もいた。

2台の圧力鍋で米を7合ずつ炊き、晩ごはんは握り飯と豚汁だった。着の身着のままの避難してきた人たちは大部屋に集まり、握り飯にかぶりついた。

みずえさんは、家の前に白いワゴン車が止まっていることに気づいた。車内には白の防護服を着た男が2人乗っており、みずえさんに向かって何か叫んだ。しかしよく聞き取れなかったため、「何？どうしたの？」と尋ねたところ、白の防護服の男が「なんでこんな所にいるんだ！頼む、逃げてくれ」と叫んだ。みずえさんはびっくりした。「逃げろといっても……、ここは避難所ですから」車の2人がおりてきた。2人ともガスマスクを着けていた。

「放射性物質が拡散しているんだ」。真剣な物言いで切迫した雰囲気だった。家の前の道路は国道114号で、避難所に入りきれない人たちの車がびっしりと停車している。2人の男は、車から外に出た人たちにも「早く車の中に戻れ」と叫んでいた。2人の男は、そのまま福島市方面に走り去った。

(朝日新聞 朗読版プロメテウス「第1話 「頼む、逃げてくれ」」)³³

(8) 津島地区の汚染

3月13日午後、「変な恰好で周囲を歩いている人がいる」という奇妙な通報が複数の住民から災害対策本部に寄せられてくるようになった。

馬場町長が自ら出向いて見に行ってみると、原発事故の防災訓練で見かけたような大がかりな防護服を着た男たちが十数人、津島地区の周辺で放射線

³³ <http://www.asahi.com/special/prometheus/bougofuku1.html>

量を測定している。文部科学省から委託された調査員のようなだったが、福島県警の警察官も含まれていた。「そんな服を着てここで活動するのはやめてもらえませんか。」と町長であることを明かして防護服の男たちに頼んでも、男たちは「(組織の) 上を通してください。」と要請を聞き入れてくれなかった。

原発事故から2か月も経った5月下旬、福島県の担当者が「SPEED I」(政府が約130億円の巨費を投じて開発した放射性物質拡散シミュレーションシステム)の拡散予測(放射性物質が津島地区に飛散する可能性を予測していた。)を浪江町に伝えなかった事実を報告しに来た時、馬場町長は、泣きながら謝罪する担当者に向かって、詰め寄った。

「放射能の汚染予測がわかっていたら、私は決して町民を津島地区に逃がさなかった。あのとき、避難所の外ではたくさん子どもたちが遊んでいた。あなた方の行為は、あるいは『殺人罪』にあたるのではないですか」

(三浦英之『白い土地 ルポ 福島 「帰還困難区域」とその周辺』119頁から121頁)

(9) 町外脱出、町長の涙

3月15日に、二本松市への避難を決定し、二本松市東和支所に災害対策本部を移転するとともに、二本松市内の体育館等を避難所として開設した。また、福島市、郡山市、川俣町などにも職員が常駐する避難所が開設された。(甲111の2・64頁)



(浪江町→津島地区→二本松市，福島市，郡山市，川俣町へ Google map)

馬場町長は、二本松市へ避難した際の心情を涙を流し続けながら、次のように述べている。

「避難の途中、道路脇の『ここから二本松市』という標識を見て思わず涙が出ましてね。震災後、そんな気持ちになったのは初めてでした。町長が、町民が、町役場が、『町外』に逃げる。本当にそんなことがあっていいの。当時、まだ津波の被災地には多くの負傷者が残されていました。そんなことを考えていると、今自分が行っていることが本当に正しいのかどうか、私自身わからなくなり・・・」(三浦英之『白い土地 ルポ 福島 「帰還困難区域」とその周辺』123頁)

4月5日から磐梯山周辺，岳温泉，土湯温泉などを中心に二次避難所が開設され，ピーク時（7月6日）には212の施設に5500人の町民が避難した。この数は仮設住宅，借上げ住宅の入居が進むにつれ減少し，2011年（平成23年）11月末には完全閉鎖となった。

本庁機能は、3月12日から浪江町役場津島支所、3月15日から二本松市役所東和支所、5月23日から福島県男女共生センター、平成24年10月1日から二本松市平石高田工業団地内の仮事務所へと移した。

(甲111の2・61頁)

4 請戸の浜（うけどのはま）

(1) 請戸の浜の悲劇

浪江町にある請戸の浜（福島第一原発の北側、直線で約7km）の沿岸地域には3月11日の15時30分過ぎに、巨大な津波が押し寄せた。

沿岸地域は壊滅的被害を受け、それまでの漁村や一面に広がっていた田畑の風景が一変し、ほとんど何もない、がれきが散乱する風景へと変わってしまった。

その日のうちに、津波が押し寄せた翌朝に津波被害者の救助活動をする事は、決定していた。救助活動の事前準備のために浜を回った消防団員は、多くの津波被害者の助けを呼ぶ声を聴いていた。

しかし、救助活動をする日の朝、原発事故による避難指示が発令され、予定されていた救助活動は中止となった。

福島県浪江町副町長渡邊文星氏は、次のとおり語る。（2012年（平成24年）8月2日弁連シンポジウム）

「3月12日早朝からの捜索予定でした。沿岸地域には15時30分過ぎに、いままで経験したことのない巨大な津波が押し寄せました。沿岸地域は壊滅的被害を受け、死亡者151人、行方不明者33人、流失家屋等600棟以上の被害を受け、それまでの漁村や一面に広がっていた田畑の風景が一変し、ほとんど何もない、がれきが散乱する風景と変わってしまいました。

地震や津波による被害者の救助活動や避難所対応を優先し、翌朝には津波被害者の救助活動を決定していました。

その矢先、3月12日午前5時44分、突如、原子力発電所から半径10km圏内に避難指示が発令されたことをテレビで知りました。この避難指示により、早朝から予定していた津波被害者の行方不明者の搜索活動が中止となりました。この時、搜索を実施していれば何人かの尊い命が救えた可能性があったと思います。

本格的に行方不明者の搜索を実施したのが、放射線量が低いことが確認され、福島県警及び消防署は4月14日から、自衛隊が5月3日と一か月以上経過してからのことでした。」

(2) 馬場町長の後悔

2011年(平成23年)3月11日、津波が浪江町を襲った。馬場町長らが詰める町の対策本部に、現場から戻った消防団員らが惨状を伝える。闇の中で気配を感じた団員が「誰かいるか」と声を掛けると、複数のうめき声が聞こえたというのだ。助けなければならない町民がいることが分かった。しかし、団員らの二次災害を恐れた馬場町長は、搜索を12日朝から行うよう指示するしかなかった。

やりきれない思いのまま町長室にいた馬場町長は、明け方、テレビから流れるニュースに驚いた。原発の半径10キロ圏内に避難指示が出ていた。馬場町長は、町北西部にある津島地区に避難させることを決めた。「生存者を放置してしまった」「夜に搜索していれば」。(2021年6月10日付福島民友「【証言あの時・番外編】故馬場有浪江町長 避難判断に後悔」³⁴⁾

馬場町長は、請戸の浜の悲劇について、声を震わせて、

「あの時のことを思い出すと涙出ますよ。・・・やあ、・・・本当にね。」

「4月の14日ですよ。1か月以上ですよ。もう亡くなっている方が。遺体見られたもんじゃないです。」と歯を食いしばりながら語った(映画「日

³⁴ <https://www.minyu-net.com/news/sinsai/sinsai10/syouden/FM20210610-624740.php>

本と原発 4年後」・09：34～09：55)。



(映画「日本と原発4年後」 09：50)

馬場町長は津島地区での数日を、「孤立無援の籠城状態」と感じていた。情報は届かず、食料にも窮した。山間部の集落では約8千人の避難を受け入れようもなく、子どもを含む多くの町民が屋外で活動していた。後に町長は、津島が原発事故で放出された放射性物質の通り道となり、高線量だったことを知った。「自分は町民に無用の被ばくをさせてしまった」。町長は自責の念をさらに深めていった。

二本松市を避難先に定めた後、本来温厚な性格の町長は、原発事故の責任追及の急先鋒（せんぼう）に変わった。「町民の命を何だと思っている」。謝罪に訪れた東電幹部には厳しい言葉で迫った。一方で町民からは「町長は何してるんだ」と、進まぬ復興への不満をぶつけられた。(2021年(令和3年)6月10日付福島民友「【証言あの時・番外編】故馬場有浪江町長

避難判断に後悔」³⁵⁾

(3) 清水社長（当時）への訴え

2011年（平成23年）5月4日，東電の清水社長（当時）が二本松市の避難所を訪問した際，避難者が，声を震わせながら，次のとおり清水社長へ訴えた。

「社長さんは，ここに来る前に，まず請戸に行かれましたか？」

「12日の朝に，いっぱい助けてくれ，クラクションをいっぱい鳴らしていたんですよ。それを助けに行けなくて戻ってきた時の消防団の気持ち，分かりますか？」

まずそちらの方の亡くなった人に頭を下げるのが人間としての筋じゃないのですか。」（映画「日本と原発4年後」・08：32～08：53）



（映画「日本と原発4年後」 08：34）

³⁵⁾ <https://www.minyu-net.com/news/sinsai/sinsai10/syouden/FM20210610-624740.php>



(2011年5月4日 AFP通信「東電の清水社長、避難住民らに土下座して謝罪」³⁶⁾)

(4) 卒塔婆

2012年(平成24年)4月、請戸の浜で亡くなった方々を供養する卒塔婆が設けられていた。ここでたくさんの方が津波と原発事故による避難指示のために救助されずに死んだ。津波によって道路のすぐそばまで乗り上げた漁船がそのままになっている。

³⁶ <https://www.afpbb.com/articles/-/2798293?pid=7170331>



(撮影日：2012年4月4日，撮影場所：請戸の浜，撮影者：海渡雄一)

(5) がれきの山



(撮影日：2013年4月5日，撮影場所：請戸の浜，撮影者：海渡雄一)

(6) 海岸もがれきがそのまま



(撮影日：2013年11月10日，撮影場所：請戸の浜，撮影者：海渡雄一)

(7) 道路脇にも砂やがれき



(撮影日：2013年11月10日，撮影場所：請戸の浜，撮影者：海渡雄一)

5 避難指示によって住民が追い出された町の様子

(1) 請戸小学校

請戸小学校は、海岸から300mに位置し、2階まで津波の被害を受けたとされる。2021年（令和3年）秋から震災遺構として公開された。



(朝日新聞2020年9月5日付「曲がる窓枠に流された調理場・福島・請戸小を震災遺構に」³⁷⁾

(2) マリンパークなみえ

マリンパークなみえは、プラネタリウムのある本館「コスモパレス」を中心にサッカーコートが一面とれる全面芝張りの「運動広場」やナイター仕様3面を含む6面の「テニスコート」、36ホールを擁する「パークゴルフ場」、地元特選牛である「双葉牛」や請戸漁港から水揚げされた新鮮な魚介類を使ったバーベキューが食べられる「バーベキュー棟」がある施設であった³⁸。

³⁷ 動画の14秒部分をスクリーンショットしたもの。

³⁸ https://www.jalan.net/kankou/spt_07547ah3330115085/



(マリパークなみえ 平成6年4月オープン 浪江町³⁹)

2011年(平成23年)3月11日, 大津波がマリパークなみえも襲った。その後の原発事故によって帰還困難区域に指定され, 人々が避難した。

2013年(平成25年)4月に, マリパークなみえの最上階から望んだ景色(下の写真)。がれきが山積みのみまである。

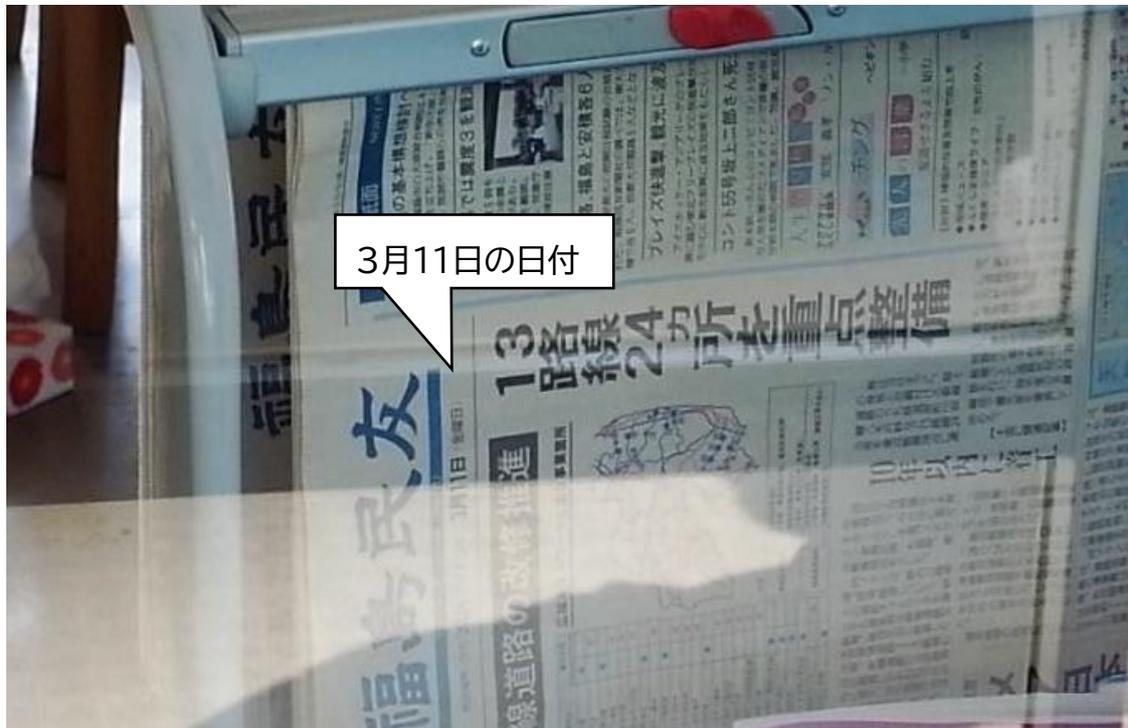


(撮影日: 2013年4月5日, 撮影場所: マリパークなみえ, 撮影者: 海渡雄一)

³⁹ <https://www.town.namie.fukushima.jp/soshiki/2/namie-history-2.html>

(3) 配達されなかった新聞

震災前日に作られた2011年（平成23年）3月11日付の福島民友の新聞が、閲覧に供されたままである。



(撮影日：2012年4月4日，撮影場所：浪江町，撮影者：海渡雄一)

2013年（平成25年）時点で，大震災を報じる2011年（平成23年）3月12日付福島民報の新聞が，配達されず，山積みになされたままであった。



(撮影日：2013年4月5日，撮影場所：浪江町，撮影者：海渡雄一)

(4) 震災当日に終日運転を見合わせる掲示

浪江駅では，2012年（平成24年）になっても，震災当日の「大地震のため終日運転を見合わせます。」との掲示がなされていた。



(撮影日：2012年4月4日，撮影場所：浪江駅前，撮影者：海渡雄一)

(5) 浪江駅前の青果店

浪江駅前にある青果店は、傾き、ガラス戸が外れたり、開いたまま放置されている。



(撮影日：2013年4月5日，撮影場所：浪江駅前，撮影者：海渡雄一)

(6) 津島地区の紅葉，高線量

津島地区の紅葉は有名であるが、高線量のため、いまも帰還困難区域である。

撮影時の放射線量は、 $25.1 \mu\text{Sv/h}$ ⁴⁰にも上った。

⁴⁰ 公衆被ばく限度の年間 1 mSv/h を、環境省の見解（屋外8時間，屋内16時間）にたって毎時に直すと $0.23 \mu\text{Sv/h}$ である。

毎時 $25.1 \mu\text{Sv/h}$ は、 $0.23 \mu\text{Sv/h}$ の約109倍もの高線量である。



(津島地区の紅葉 撮影日：2012年4月4日，撮影場所：津島，撮影者：海渡雄一)



(津島地区で線量計で測定した値，撮影日：2012年4月4日，撮影場所：津島，撮影者：海渡雄一)

(7) 草に覆われたJR常磐線

2014年（平成26年）9月，浪江駅の隣の駅である桃内（ももうち）駅（南相馬市小高区）の線路にも草が生い茂っていた。



(2014年9月撮影 JR常磐線桃内駅)⁴¹

2015年(平成27年)9月, 浪江町内のJR常磐線をセンニンソウが覆い尽くそうとしていた。



(2015年9月 浪江町内のJR常磐線)⁴²

⁴¹ 中筋純『かさぶた 福島The Silent Views』54頁, 55頁

⁴² 中筋純『かさぶた 福島The Silent Views』136頁, 137頁

6 現在も避難が続いている

原発事故によって、浪江町21000人の町民は全国に散り散りになった。

(以上、浪江町ホームページ)

子どもたち(当時約1700人)は、原発事故前は小学校6校、中学校3校の計9校に通っていたが、原発事故によって全国699校へ散り散りになった(映画「日本と原発4年後」1:32:24～1:32:58馬場町長)。

原発事故時の人口は約21,500人だったものの、2021年(令和3年)11月時点での居住者は約1,600人のみである。その他の町民は、現在も町外での避難生活を続けている。避難先は福島県内が約7割、県外が約3割(45都道府県)である。

2020年(令和2年)9月に実施した住民意向調査では、「戻りたいと考えている」が10.8%、「まだ判断がつかない」が25.3%、「戻らないと決めている」が54.5%となっている。(甲112)

浪江町内は、2013年(平成25年)4月に空間放射線量が低い順に、A避難指示解除準備区域、B居住制限区域、C帰還困難区域が指定され、A・B区域では日中の立入りが可能となった。それ以降、A・B区域については、除染・インフラ復旧・生活基盤の再生を集中的に進めた結果、2017年(平成29年)3月31日に避難指示が解除された。浪江町役場の機能の大部分は、2017年(平成29年)4月1日より元の役場本庁舎に戻った。(甲112)

帰還困難区域(C区域)については避難指示が継続しているため、現在も引き続き居住できない。(甲112)

第5 飯館村（いいたてむら）

1 飯館村の概要

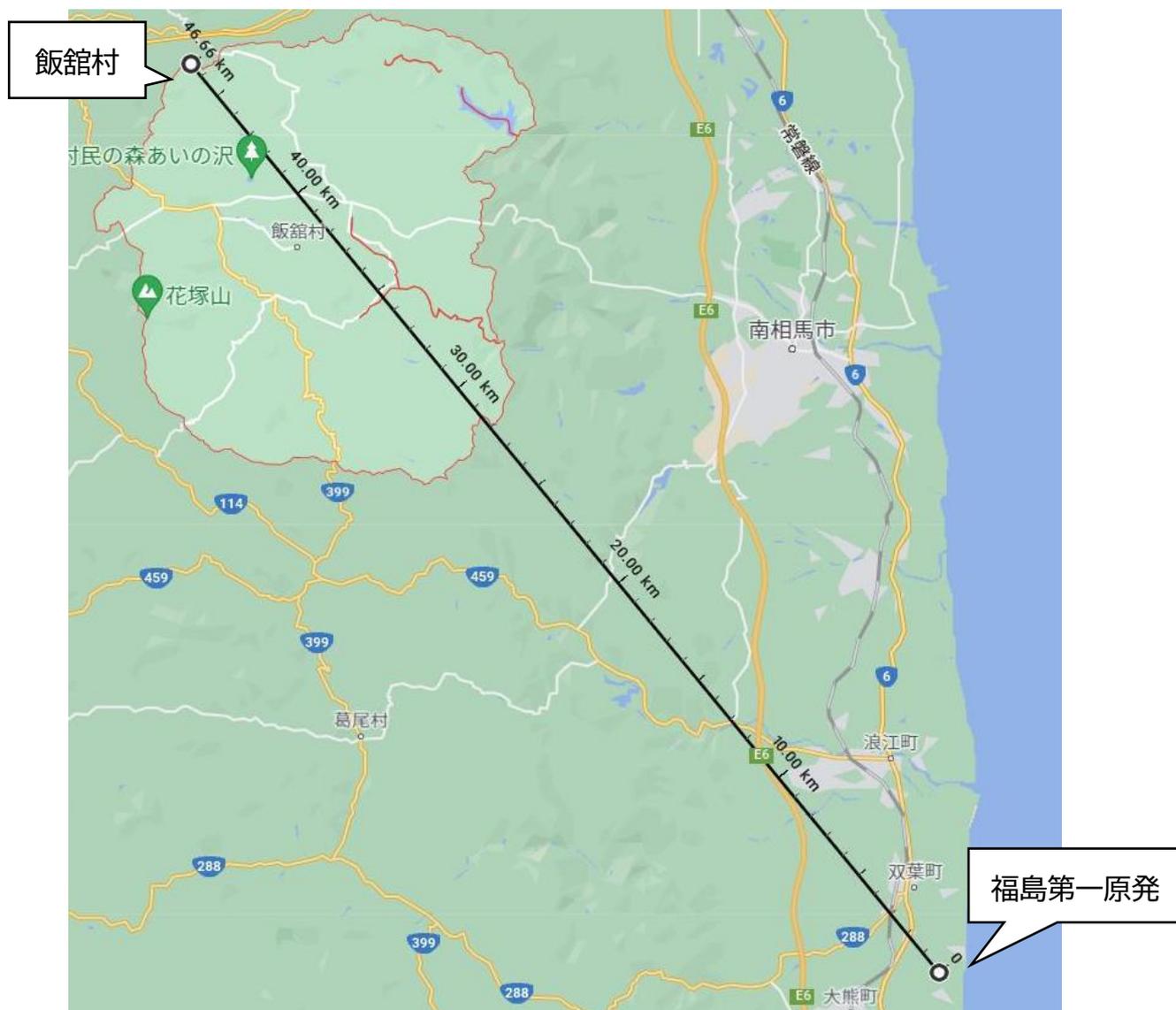
飯館村は、阿武隈山系北部の高原に開けた豊かな自然に恵まれた美しい村である。

総面積230.13km²の約75%を山林が占めた地形は比較的なだらかで、北に真野川、中央に新田川と飯樋川、南部に比曾川が流れその流域に耕地が開かれ集落を形成している。

年平均気温は約10度、年間降水量1,300mm前後で高原地帯独特の冷涼な気候にある。（以上、飯館村ホームページ⁴³）

飯館村は、福島第一原発から約27km乃至約46kmに位置する（下地図）。

⁴³ 飯館村「村の概要」 <https://www.vill.iitate.fukushima.jp/soshiki/1/63.html>



(飯舘村全体，福島第一原発との位置関係 Google map)

2011年（平成23年）3月11日の東北地方大震災，福島第一原発事故直後の飯舘村は，ライフラインが断絶している中で，沿岸部からの避難者を受け入れた。その対応に追われる中で，風に運ばれ雨と雪で降下した放射性物質による村内の汚染が判明した。村中に激しい衝撃が走った。村はその後，約1か月遅れて計画的避難区域に指定され，さらに全村避難という想定外の事態に直面した。（甲114・29頁）

4月11日には国が計画的避難区域（福島第一原発から20km圏外で年間

積算放射線量が20 mSvを超える区域)の設定構想を発表し、村は、その日のうちに行政区長会を開催し、村内企業にも説明を行った。4月19日に、菅野村長は、官邸を訪れて菅直人首相に対して、「多くの住民が職を失い家畜を失い、生活が成り立たなくなる」と全村避難のリスクを直訴し、国の十分な支援と早急な対応を強く求めた。

村は、4月22日に計画的避難区域の設定を受けて全村避難へ大きく舵を切った。(甲114・32頁, 33頁)。

2011年(平成23年)の夏、一時避難先から、応急仮設住宅・借り上げ住宅へと移り住む二次避難が進んだ。二次避難先は、乳幼児や妊産婦のいる家庭の入居希望が優先され、残数が抽選で割り振られた。住宅の立地や広さなどにより、家族がさらに分散して入居するケースが多くみられた。(甲114・42頁)

2017年(平成29年)3月31日、長泥地区を除く村内の避難指示が解除された。令和3年(2021年)時点でも、長泥地区は帰還困難区域のままである。令和3年(2021年)10月1日時点の避難者数は3556人、帰還者1236人である⁴⁴。



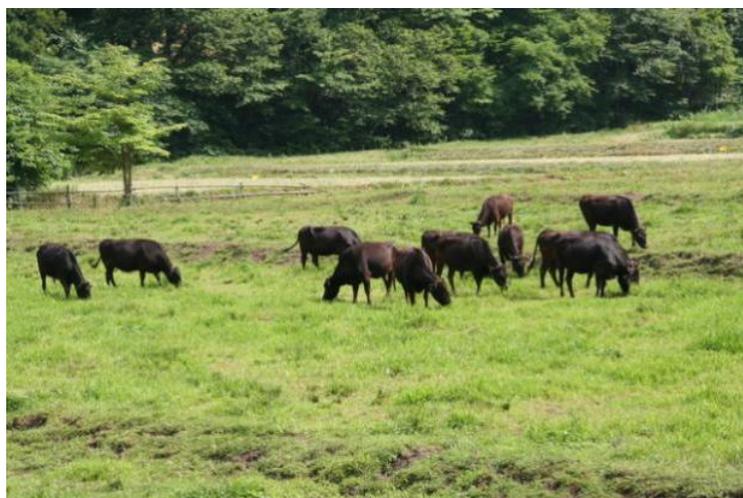
(令和2年3月10日時点 避難指示区域の概念図⁴⁵)

⁴⁴ 飯館村ホームページ <https://www.vill.iitate.fukushima.jp/uploaded/attachment/12201.pdf>

⁴⁵ 福島県ホームページ

2 原発事故前の村の概要

飯館牛は、緑豊かな阿武隈高原で育った飯館特産として有名な黒毛和牛である。特産品として全国にその名を広めようと、1984年（昭和59年）から村一体となりブランド化に取り組んできた。しかし、原発事故によってほとんどの酪農家が廃業に追い込まれ、村のシンボルだった牛たちも姿を消した。守り続けてきた飯館牛のブランドを何とか絶やさぬよう、酪農家によりさまざまな形で活動が続けられている。



（2009年（平成21年）初夏 飯館牛の放牧の様子⁴⁶）



（飯館牛⁴⁷）

<https://www.pref.fukushima.lg.jp/img/portal/template02/hinansjijihensen20200310.pdf>

⁴⁶ 飯館村デジタルアーカイブ <http://archive.vill.iitate.fukushima.jp/#modal756>

⁴⁷ 2015 福島県飯館村デジタルアーカイブ

<http://archive.vill.iitate.fukushima.jp/dsearch/da/detail.php?type=10&literatureId=3633&detailTab=1>



(2007年(平成19年)7月に行われた夏まつり牛肉フェア⁴⁸)

飯舘村では全行政区から多くの住民が参加して村民体育大会が開かれていた。3人4脚や、ボールの運び方をクジで決める「運がよけりゃ」、長靴がパトンの「長ぐつりレー」など工夫を凝らした競技が行われていた。



⁴⁸ 2015 福島県飯舘村デジタルアーカイブ

<http://archive.vill.iitate.fukushima.jp/dsearch/da/detail.php?type=10&literatureId=3633&detailTab=1>



(第44回村民体育大会⁴⁹)

大自然と清らかな水，そして豊かな風土に恵まれ，悠々の時を経て造りあげた結晶であり，村の宝「いいたて みかげ石」が豊富にある⁵⁰。建築用石材，墓石等に使われる。



(左：原石による石積，右：車止め⁵¹)

伝統芸能として，五穀豊穰，悪霊退散を祈って奉納され，比曾・草野ともに村指定無形民俗文化財である「三匹獅子舞」や，小正月に豊作を祈って華やかな踊りを奉納する重要無形民俗文化財である「田植踊り」，宮仲，大火，前

⁴⁹ 2015 福島県飯舘村デジタルアーカイブ

<http://archive.vill.iitate.fukushima.jp/dsearch/da/detail.php?type=10&literatureId=5635&detailTab=1>

⁵⁰ 飯舘村「地場産業 <https://www.vill.iitate.fukushima.jp/site/kanko/69.html>」

⁵¹ <https://www.vill.iitate.fukushima.jp/site/kanko/69.html>

田，大倉地区で継承されてきた神楽，佐須地域の創作太鼓で祭りの華として大活躍であった「虎捕太鼓」などが行われていた⁵²。



(左：三匹獅子舞，右：田植踊り)⁵³



(左：神楽，右：創作太鼓)⁵⁴

約1200年の歴史を持つ綿津見神社では，毎年祭りが行われ，それぞれの地区で受け継がれている伝統芸能や神輿，山車などが参加していた⁵⁵。

⁵² <https://www.vill.iitate.fukushima.jp/site/kanko/74.html>

⁵³ <https://www.vill.iitate.fukushima.jp/site/kanko/74.html>

⁵⁴ <https://www.vill.iitate.fukushima.jp/site/kanko/74.html>

⁵⁵ <http://archive.vill.iitate.fukushima.jp/#modal930>

<https://www.nhk.or.jp/sendai/hisaichikara/report/170514.html>



(2009年(平成21年)綿津見神社大祭 ヨサコイ踊り⁵⁶)

震災前ののどかな飯舘村の秋(下の写真)。澄み渡る空気、山があり緑があり、田園風景を絵に書いたような風景がそこにあった。

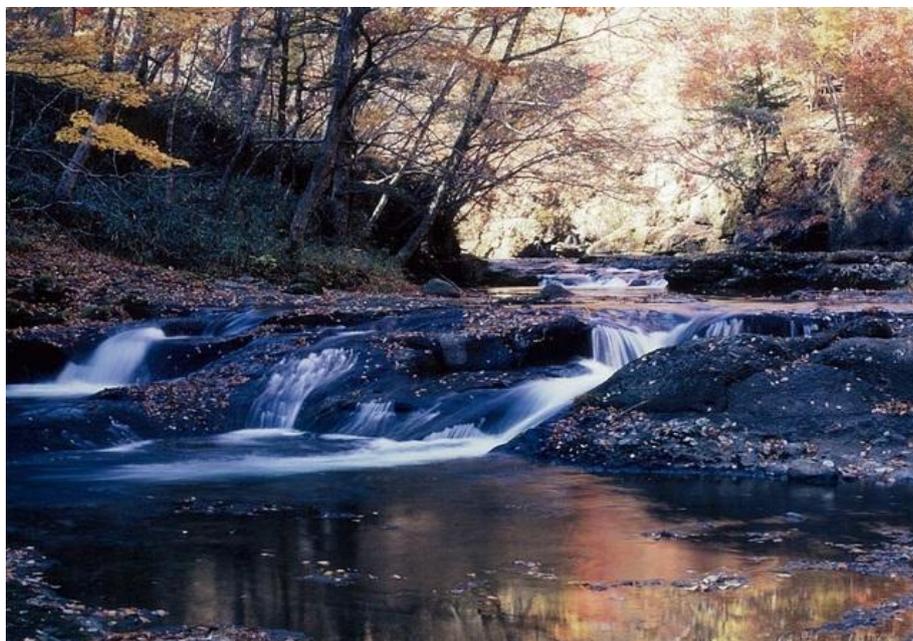


(秋の飯舘村⁵⁷)

⁵⁶ <http://archive.vill.iitate.fukushima.jp/#modal930>

⁵⁷ <http://archive.vill.iitate.fukushima.jp/#modal752>

飯舘村大倉の真野川溪谷（下の写真）では、上流はモリアオガエルが生息するほどの清流で、一年を通して自然の移り変わりが楽しめる。



（晩秋の真野川溪谷⁵⁸）

3 原発事故による被害状況、避難、役場の移転等

（1）地震による被害

3月11日の地震によって、飯舘村は震度6弱に襲われた。

落石や土砂崩れなど、道路や農地などにも、本震・余震による被害があった。

⁵⁸ 2015 福島県飯舘村デジタルアーカイブ
<http://archive.vill.iitate.fukushima.jp/#modal747>



① 大火比曾線……………法面が崩壊



② 小滝大倉線……………落石

59

(地震による落石(小滝大倉線))⁶⁰

(2) 沿岸部からの避難者の受け入れ

3月11日夜からは、沿岸地域から避難する車が列を作り、県道12号線など村内の主要道路は完全に麻痺していた。

村の施設や小学校を避難所として開放し、消防団が交通誘導し、村女性消防隊や婦人会が炊き出しを行い、村社会福祉協議会など多くの住民が対応に追われた。

福島第一原発1号機が水素爆発した12日15時36分以降も、多くの村民による献身的な避難所運営が続けられていた。村から約40kmも離れた先での原発事故の影響が村に及ぶなどと予想する者は、この時点で誰もいなかった。(甲113・99頁, 100頁)



沿岸部からの避難者(いちばん館)



各家庭の米を持ち寄っての炊き出し

⁵⁹ 甲115・176頁, 177頁

⁶⁰ 甲113・98頁

(左：沿岸部からの避難者，右：各家庭の米を持ち寄っての炊き出し)⁶¹

(3) 村に現れた白い服の男

14日，村役場には青森県原子力センターの職員と名乗る人たちが来た。彼らは、「福島県の依頼で，環境放射線モニタリングポストを設置しに来た」と言う。白い防護服を着た人が見慣れない機会を設置するのを見て，あわてて村を出て行った避難者もいた。この時点ではまだ，表示盤は毎時90ナノシーベルトを示していた。(甲113・100頁)

(4) 放射性物質を乗せて降る雪

15日午後，雨の中，モニタリングポストの測定値を確認したところ，表示はナノからマイクロに変わっていた。マイクロはナノの1000倍である。雨は雪に変わり，しんしんと降っていた。数値は見る間に上昇していく。

「今まさに，この場所に，雪と一緒に放射能が降ってきているということか？」

見えないはずのものが見えてしまったような，そんな錯覚に陥りそうになった。

午後6時20分頃には，毎時44.7 μSv ⁶²を記録した。(甲113・100頁)

(5) 水道水の摂取制限

15日午前11時には福島第一原発から30km圏内（飯舘村の蕨平（わらびだいら）地区を含む。）が屋内退避区域に指定された（甲114・70頁）。

20日には村内の水道水から基準値を超える放射性ヨウ素が検出され，翌21日から摂取制限を実施した（甲114・70頁）。

⁶¹ 甲113・99頁

⁶² 公衆被ばく限度の年間1mSv/hを，環境省の見解（屋外8時間，屋内16時間）にたって毎時に直すと0.23 $\mu\text{Sv/h}$ である。

毎時44.7 $\mu\text{Sv/h}$ は，0.23 $\mu\text{Sv/h}$ の約195倍もの高線量である。



(左：3月26日飲料水等支援物資の受け取り，右：3月27日自衛隊から受け取った飲料水の保管)⁶³

(6) 「専門家」の講演を聞いて飯舘村に留まったものがあること

福島県の主催で、飯舘村で、3月25日に高村昇氏（長崎大学大学院医学・薬学総合研究科 原爆後障害医療研究施設放射線疫学分野）が講演した。約300人の村民が集まり、「これからも安心して村で暮らしていけるのか」と質問したのに対し、高村教授は「医学的に注意事項を守れば健康に害なく村で生活していただけます」と答えている（「かえせ飯舘村 飯舘村民損害賠償等請求事件申立書等資料集」48頁）

3月31日には、経済産業省原子力安全・保安院が「独自に放射線による被ばく量を試算した結果、内閣府原子力安全委員会の避難基準の約半分にとどまった」ことを明らかにして「直ちに避難する必要はない」と公表した（「かえせ飯舘村 飯舘村民損害賠償等請求事件申立書等資料集」48頁）。

4月1日には、上記高村氏とともに福島県放射線健康リスク管理アドバイザーに就任した山下俊一氏が、飯舘村を訪れて村議会議員と村職員を対象に非公開の講演を行った。そこで「今の濃度であれば、放射能に汚染された水や食べものを1ヵ月くらい食べたり、飲んだりしても健康には全く影響はありません」などと発言したとされる（「かえせ飯舘村 飯舘村民損害賠償等請求事件申立書等資料集」48頁）。

⁶³ 甲115・21頁

これら「専門家」の講演は、直接に聴いた村民のみならず、間接的に講演内容を聞いた村民も少なからずおり、村民の避難に関する判断に与えた影響は大きい。

当初、鹿沼や飯坂温泉などに避難しつつ、安全であるという高村昇氏、山下俊一氏らの講演を聴いた家族から知人の意見で、高線量の飯舘村に戻った人たちもいるのである。(以上、「かえせ飯舘村 飯舘村民損害賠償等請求事件申立書等資料集」48頁)



(左：高村昇氏の講演会，右：山下俊一氏の講演会)⁶⁴

(7) 全村避難

4月22日、国は、村全体を計画的避難区域に指定した。

国が1か月以内での避難を求めてくる中で、飯舘村は、限られた時間の中で、村民同士のつながりを維持しながら全村避難ができないか模索した。村民同士の強い絆が作り上げてきた村である。それを、村が断ち切って村民を放り出すような無責任な方策は、決して取ってはならないとの考えであった。避難先選定の念頭に置かれたのは、避難先から村まで1時間圏内の通える範囲であること、さらにコミュニティを維持できるよう行政区毎に避難することだった。村民への説明会や懇談会も回を重ねた。

⁶⁴ 甲115・21頁，27頁



(5月2日 被災証明の申請や避難先の相談に訪れる住民で混み合う役場窓口⁶⁵⁾)

避難先の確保は難航していた。時はすでに、震災発生から1か月が経過していた。沿岸地域の避難が進んでおり、遅れて避難することになった飯舘村の受け入れ先は限られていた。そのため、一次避難には、飯舘村が斡旋した住宅への入居、旅館やホテルなどへの宿泊、あるいは村民が自ら見つけた住宅を県の借り上げ住宅と申請しての入居など、さまざまな選択肢が設けられた。

そうした結果、約6000人というおよそすべての村民の避難ができ、最後に、6月22日に村役場機能が福島市飯野支所に移転した。計画的避難区域指定からちょうど2か月後であった。(甲113・102頁, 103頁)

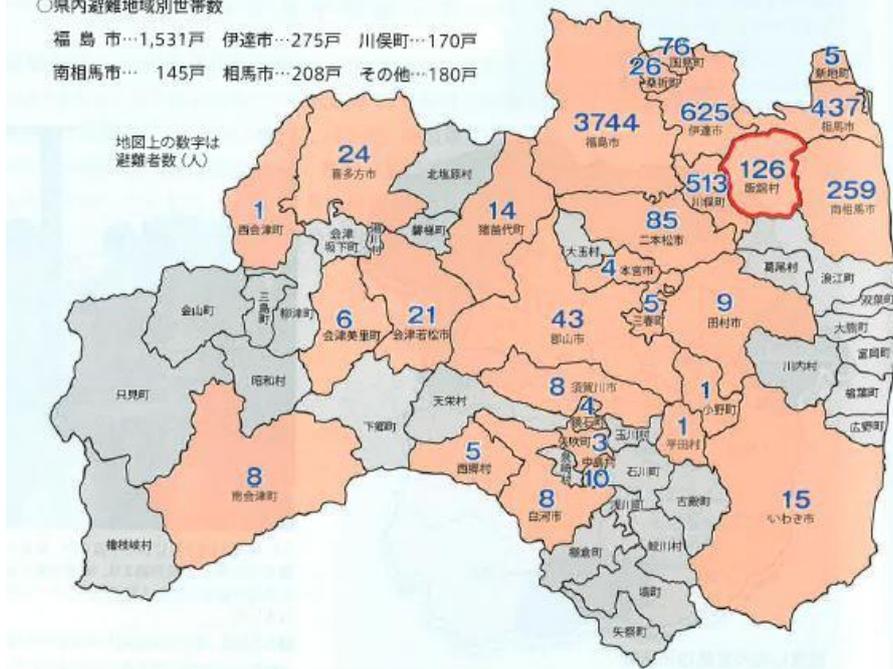
⁶⁵ 甲114・20頁

平成23年9月1日現在の村民の状況

1. 現住人口 = 5,984人
(平成22年12月1日現在)
 ※国勢調査人口に異動反映した数
2. 避難者数 = 6,628人
※震災当時住んでいた人・転出者等含む
3. 未避難者数 = 19人(14世帯)
- 県内外の避難状況
- ・県内 避難人数…5,960人 避難世帯数…2,509戸
 - ・県外 避難人数… 536人 避難世帯数… 295戸
 - ・国外 避難人数… 4人 避難世帯数… 2戸
 - ・いいたてホーム 人数… 107人 世帯数… 107戸
 - ・村内 人数… 126人 世帯数… 121戸

○県内避難地域別世帯数

福島市…1,531戸 伊達市…275戸 川俣町…170戸
 南相馬市… 145戸 相馬市…208戸 その他…180戸



(2011年(平成23年)9月1日時点の飯舘村民の避難状況⁶⁶⁾)

(6) 原発事故が奪った農業者の誇り

飯舘村では、農業者の長年の取り組みが実を結び、農産品や花卉の品質の高さは広く知られ、畜産業においても飯舘牛がブランド牛として売り出されていた。

しかし原発事故によって、農作物の作付は全村で見送られ、多くの牛農家が、高い技術で手塩にかけてきた牛を手放さざるを得なくなった(甲114・34頁)。

⁶⁶⁾ 甲114・43頁



(高価な農機具を置いて避難する農業者の不安を解消するため農機具は村振興公社たい肥センター敷地で一斉保管⁶⁷⁾)



(多くの牛が体表汚染度の検査後、県家畜市場などの臨時のせりへ送られた。)⁶⁸⁾

4 いいたて全村見守り隊

全村避難に伴い、村内を24時間体制で巡視するいいたて全村見守り隊が発足した。約400人の村民が見守り隊員として線量を管理しながら自分たちの行政区をパトロールした。不審者発見などの通報が検挙につながったが、高線

⁶⁷⁾ 甲114・34頁

⁶⁸⁾ 甲114・34頁

量のために避難指示が出されている村の巡視活動によって被ばくを余儀なくされた。



(2011年(平成23年)6月6日 いいたて全村見守り隊出発式)⁶⁹

5 仮設住宅での生活

松川応急仮設第二住宅(109戸)は、2011年(平成23年)7月27日完成した。

応急仮設との名称のとおり、仮設住宅自体は長期間そこで居住することを想定して建築されたものではない。部屋自体が狭く、壁も薄い。そのため、隣の音が響き、プライバシーへの配慮がされていない。壁が薄いため、冬の室内は寒く、夏は暑さが部屋にこもる。(飯舘村民救済弁護団「飯舘村現地調査報告書」4頁)

⁶⁹ 甲115・154頁



(松川応急仮設第二住宅)⁷⁰

6 除染が豊かな土地を奪った

(1) 除染方法

田・畑の除染（放射性物質による汚染を取り除く）は、田・畑の表土を3～5cmはぎ取って、他所から運んできた土を入れるというものである。森林については、林縁から20cmまでの部分でしか、下草刈りや、落ち葉やリター層（森林において地表面に落ちたまま、まだ土壌生物によってほとんど分解されていない葉・枝・果実・樹皮・倒木など）の除去をしないため、実質上除染されておらず、風に乗って放射性物質が飛来する。

⁷⁰ 飯舘村民救済弁護団「飯舘村現地調査報告書」（実施日：平成27年11月9日）4頁

本格除染で行う除染方法



(除染方法⁷¹)

(2) 除染前の風景

除染前の飯舘村の風景は、次のとおりである（飯舘村民救済弁護団「飯舘村現地調査報告書」（実施日：2015年（平成27年）11月9日）別紙15）。



(2009年5月15日午前5時43分 田植えの準備完了)

⁷¹ 甲115・143頁



(2009年5月26日 子どもたちは農道を歩いて登校していく。)



(2010年10月1日朝6時30分頃 稲刈りが終わり、脱穀が済むと、田んぼに「藁立て」をする。藁を乾燥させ、牛舎の敷料として保存するため。)



(共同牧場へ、牛たちを早朝連れていく。)



(牛舎の敷き藁は、稲作の副産物。汚れたら新しい敷き藁に換え、使い終わった方は田畑にすき込んで肥料にする。)



(自家用野菜の畑。新鮮な野菜を育てて食べ、知人に分け、いただき、保存用に漬物や凍み大根にする。食べる野菜の大半を賄うのが飯舘村の生活であった。)

(3) 除染の様子

飯舘村の除染の様子は、次のとおりである（飯舘村民救済弁護団「飯舘村現地調査報告書」（実施日：2015年（平成27年）11月9日）別紙16）。



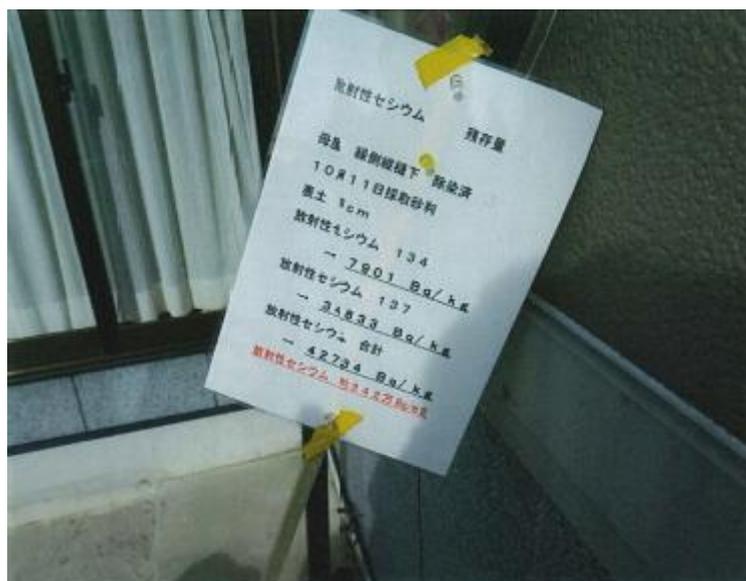
（2015年10月20日表土を剥ぎ，客土で覆ったところにゼオライトを撒いてすき込んでいる。）



（除染し，客土したところにゼオライトをすき込んでいるところ。ゼオライトには作物のセシウム値を減らす効果があるという。）

(4) 除染後も高濃度の放射性物質が検出される

除染後も，風に乗って放射性物質が飛散するためか，次のとおり，高濃度の放射性物質が検出される（飯舘村民救済弁護団「飯舘村現地調査報告書」（実施日：2015年（平成27年）11月9日）10頁）。



(除染前の自宅前の表土から、高濃度の放射性セシウムが検出されている。放射性セシウム134→7901Bq/kg, 放射性セシウム137→3483Bq/kg, 放射性セシウム合計→4273Bq/kg)



(母屋縁側縦樋下での空間線量 1. 312 μ Sv/h⁷²)

⁷² 公衆被ばく限度の年間1 mSv/hを、環境省の見解(屋外8時間, 屋内16時間)にたつて毎時に直すと0. 23 μ Sv/hである。

1. 312 μ Sv/hは, 0. 23 μ Sv/hの約6倍である。



(自宅前の道路端での空間線量 $3.15 \mu\text{Sv/h}$ ⁷³)

(5) 長年大切に育んできた豊かな土を奪われた悲しみ

除染のために剥ぎ取られた土は、フレコンバックに詰められて積み上げられている。



(映画「日本と原発4年後」・12分17秒 フレコンバックの山)

⁷³ 公衆被ばく限度の年間 1 mSv/h を、環境省の見解（屋外8時間，屋内16時間）にたって毎時に直すと $0.23 \mu\text{Sv/h}$ である。

$3.15 \mu\text{Sv/h}$ は、 $0.23 \mu\text{Sv/h}$ の約1.4倍である。

飯舘村で農業、畜産業を営んでいた菅野榮子さんは、次のとおり生業を失った無念さ、無力感を訴えている。

「悲しくなってしまう。

フレコンバックみると涙ぼろぼろ出てしまうよ。

土の中には何十年も、山から木の葉さらったり、草を刈って牛に食わせたりしたその有機肥料がいっぱい入ってんだって。その土が。それどこにいつちまうんだべな。」



(映画「日本と原発4年後」・13分23秒)

7 避難指示解除後も戻る人は少ない

飯舘村は、2017年（平成29年）3月31日に長泥地区を除く地域、すなわち大半の地域の避難指示が解除された。

しかし、避難指示解除から約4年半が経過した2021年（令和3年）10月になっても、避難者は3556名にのぼり、帰還者は1236名のみである⁷⁴。多くの避難者が避難先に定住し、また子どもたちへの教育環境が整っていない

⁷⁴ <https://www.vill.iitate.fukushima.jp/uploaded/attachment/12201.pdf>

いことや放射性物質の汚染への懸念も帰還を思いとどまらせている（東京新聞 2021年（令和3年）1月18日付「縮みゆく自治体 データで見る住民帰還 <あの日から・福島原発事故10年>」⁷⁵）。

居住者の年齢構成（下図）をみると、65歳以上の人が占める高齢化率の上昇が著しい。飯舘村の高齢化率は56.4%と報じられている（同上）。福島県の高齢化率が31.9%と比較すると極めて高い高齢化率である。



（東京新聞2021年（令和3年）1月18日付「縮みゆく自治体 データで見る住民帰還 <あの日から・福島原発事故10年>」⁷⁶）

第6 まとめ

以上は福島第一原発事故による被害のごく僅かに過ぎないが、福島第一原発事故は、ある日突然、人々に無用な被ばくをさせ、人々の生活を奪い、住み慣れた土地から人々を追い出し、村や町全体をまるごと奪った。そして、奪われた生活、土地、村や町全体は、いまだに元通りに戻っていない。

これほどの甚大な被害を招く施設は、他には存在しない。

このような甚大な被害を招かないために、原発は第1層から第5層（避難計画）までの複数の防護階層で何重にも防護しなければ、安全（人々を無用に被ばくさ

⁷⁵ https://www.tokyo-np.co.jp/article_photo/list?article_id=79669&pid=482125

⁷⁶ https://www.tokyo-np.co.jp/article_photo/list?article_id=79669&pid=482125

せない) を確保できないのである。つまり、第1層から第5層のいずれか一つでも欠ける場合は、安全を確保できていないのであるから、人格権侵害の具体的危険がある。

以上